

メイド共観察記録

ナレーショナー：[削除済み]

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある者にとってこれは、再生の物語
ある者にとってこれは、誕生の物語
ある者にとってこれは、再起の物語
ある者にとってこれは、娯楽の物語
あるいは、世界を救う物語

「んなわけあるか!」「棒人間のくせに!」「あ!、邪神様!」「お前、増えるのかよ」「筋
肉ムキムキマッチョメンの変態め」「私にはご褒美です」「聖剣は抜いて勇者のケツに刺
しといた」「スケルトンって骨が見えるんだよね?」「内蔵じゃないよね?」「誰がまな板

だ!!」「シリアルスちゃんが息してない!!」「皆丸太は持ったな!!」
……もうどうにでもなれ、こんな世界。

「ふう、こんなところですかね。それでは、人形劇……いいえ、即興劇を始めるとしますか】

「この小説、なろう様にも投稿しています。特殊タグの分、加筆してありますし、こちらの方が楽しめると思いますよ?」

目 次

第0章 終わりを告げる夜明けの暁

1 勝気で寂しがりなお嬢さまとズレ
てるメイドと……

プロローグ

15 1

2 悪夢であるものとこれから悪夢に
なるもの

23

3 主神と女神と棒人間と

31

4 いわゆる(作中キャラに対する)説

40

明回

5 『夜』のメイドさん百面相!

6 日記

57

7 幼子 ～日記の続き～ | 63

第終章 人形たちは嫌い合う Plea
se Restart

8 極限まで取り乱してると口調乱れ
るよね

70

9 心の奥底と記憶の彼方は似た者同

士

10 悪夢再び

88

11 初めましてでしょーが

11

12 「では、ニアたん」

12

13 「『もう遅い』」

13

14 「あ！ 私のパッド！」

14

139 126 110 99 88

13 騙し騙され騙させ

| |

14 人形劇の結果

| |

第1章 人形たちは嫌い合う

T r i

a n g u l a r H a t e

15 再起動 w i t h B e l o v

ed S t r a n g e r

16 D E T A (データ)

| |

176

A I R e S (アイリス)

| |

189

169 158

第0章 終わりを告げる夜明けの暁

1 勝気で寂しがりなお嬢さまとズレてるメイドと……

コツコツと、

窓と扉が並ぶ薄暗い大理石の廊下に足音が鳴り響く。

音の発生源は、夜だというのに

カーテンを開けながら廊下を進む。

窓から月明かりが差し込んだ。

ほどなくして、

周囲の扉と装飾の格が違う扉が突き当たりに見えた。

その扉の前に着くと、人影は立ち止まつた。

そして、

唐突に、

満足した顔で頷き、

音を立てずにドアノブを回した。

†

†

†

「で、説明して貰もらおうかしら」

さつき部屋に入つていつたメイドが、天蓋てんがい付きベットの横で正座させられていた。

「何で目が覚めたら、私の横にあなたが寝ているのかしら」

「申し訳ありません。起床の時間より早く寝室に着いてしまって。思いの外、疲れていたらしく、睡魔に負けました」

「いや、それ説明になつて無いからね。私が聞いていることは、何で私のベットで寝ていたのかつて話。普段は扉の前でモーニングコールしてくるじゃない」

「それはですね、あれです。睡眠をきちんと取るためは、上質な寝具で寝るべきですか
ら」

「へへ、あなたこの前、机に突つ伏して寝ていたじゃない。熟睡だつたわよ」

勿論もちろん真相は違うのだ。

ただ、口が裂さきけても言えないことだが。

主人と同衾どうきん、つまり一緒に寝たいだけだなんて。

どうしようも無く、口が裂さきけても言えないのだ。

「そんなことよりお嬢さま。早くお召し物をお換えにならないと、風邪を引きますよ。
それとも見せつけているのですか？」魅惑みわくの口りばでえを」

メイドは誤魔化しにかかりつた。

お嬢さまは起きてすぐメイドを問とい詰めていたから、スケスケで風通しの良いネグリジエ姿のままなのだ。

「ネグリジエのお嬢さまは可愛らしく、くしやみをしたあと頬ほおを染めた。

〔女同士ためいきでしょ。見せつけてどうするの?〕

溜息ためいき1つ。

「もういいわ。この件は不問とにします。朝食の準備をして頂戴ちょうだい」

命を受けたメイド——ローゼ・キュリエードは、少し落胆らくたんしたように顔を伏せた。

直後、凜リンとした雰囲気を纏まとい、

「承りました」

と述べ、部屋の中から厨房へ向かつた。

「……」

追い出した者、残された者は、ハアーツと溜息をついた。

†
†
†

ここはラングドニ邸。銀髪碧眼のメイドローゼ・キュリエードと、金髪緋眼のお嬢さま、二ルソニア＝A＝ラングドニが住んでいる。

以上説明終わり。地の文終了。

え、短いって？ 真面目にやれって？ そもそもお前は誰だって？

なんで地の文を認識して、書き込むことができるのかだって？

「いやですね、色んな小説を読んできているハーメルンの読者諸君なら、私が誰か
ぐらいわかりますよね？」

「分からないんですか？ そんな！ それじや何のために小説読んでるんですか？」

「…………すみませんでした。誤りますからそんな目で見ないでください」

「あっ！ あっ！ 運営さん！ 違います！ 馬鹿にしたとかじやなくてちょっとし
た小粋なブラックジョークなんです！ なので——」

「…………この度は申し訳ありませんでした…………続きどうぞ……」

†
†
†

「本日の朝食は、昨日の野菜のスープ、ゆで卵、ベーコン、バター付き白パンになります」

運ばれて来た物を上品に口に運ぶ二ルソニア。

ローゼは、主が一息ついた所に、紅い液体で満たした水晶のワイングラスをテーブル

に置いた。やはり有能か?

ちなみに、先程まで食事の邪魔にならないよう^(さきほど)に背景と化していた。ワイングラスを置く時も、気配を減少させていた。

その結果、起きたことは、

スツ。 ビクツ!! ガシヤン!!

突然横から現れた手に驚き、

ニルソニアの身体が跳ねて、膝^(ひざ)がテーブルにぶつかつた。

衝撃で皿が、食器が、宙を舞い、床に叩きつけられる。

しまいに、聞こえてくるメイドの失笑。どうやら堪えきれなかつたようだ。無能。

割れた皿の後処理も終わり、

二ルソニアは、改めて紅い液体に口をつけた。

鮮血を嘔^(えんか)下するたび、妙な色気を帶び、顔は恍惚^(こうこつ)の表情を浮かべていた。

そう、二ルソニア＝A＝ラングドニは吸血鬼。

「ローゼの血液は濃厚で美味しいわね。仕事は…（催促すれば）出来るし、料理も血も美味しいし、」

溜息ためいき一つ。

「これで、いたずら好きと、馴れ馴れしさが消えたら完璧なんだけど」
 「——失礼な。元から私は完璧かべです。……何間違えているのですか？」それだと私がま

な板みたいじゃないですか」

「え、なんで修正入れたのに何で分かるんですか？『完璧です』を『完璧です』って書き間違えかけてすぐに直したんだけど。あれ？反映されてない？直しておきましよう。あ、どうも、未来の私です。過去の私はいろいろやらかしたそうですが、別の時間軸です。無関係です、はい。……続きをどうぞ」

† † †

「失礼な。もとからわたしは完璧です。どちら辺が馴れ馴れしいのでしょうか。厚かましいのは、お嬢さまでしょうに」

溜息二つ目。

「そういう所が馴れ馴れしいのよ。それで？私のどこが厚かましいの？」

「顔」

もはやこの時、敬う氣はゼロに近い。

「……あとで覚えてらっしゃい、はあ。口一ゼ——今日のスケジュールは？」
 ローゼは少し頑垂うなだれ、顔を上げ、

メイドは答える。

「本日のタイムテーブルは、正午（真夜中）まで領主の事務仕事。そこからは、今日のメイドは答える。

イン。^{ブランドムーン}紅月祭です」
^{ブランドムーン}紅月祭

それは、吸血鬼たちのお祭りだ。

先代のラングドニ辺境伯が世界に広めた祭りだ。

一年の中で一日だけ月が紅く染まる日がある。

昔は不吉の象徴だったが、今では酒飲み共に愛されている。

二ルソニアは前半イヤーなお顔をしていたが、紅月祭と聞いた時パアーツと花咲いた。

「紅月祭！ 今日だつたのね！ もつと早く言ってくれればいいのに」

「すみません。お嬢様」

「……ああ、あなたを拾つたのも、紅い月の日だつたわね。もう十年か。おおきくなつたわねー」

しみじみと、近所のおばちゃんっぽいことを漏らすお嬢様。

「ええ、お陰様で、身長も胸も器も胸も、お嬢さまより大きくなりました」
ローゼは二ルソニアの躰を見渡して、

「それにも二ルソニアお嬢さまは、まつたく変わりませんね（笑）」
 哀れみの目宣戦布告したを向けた。

ローゼ16歳。二ルソニア外見12歳。

現代で言うところの高校生が、背丈が自分のお腹までしかない小学生に張り合った瞬間であつた。

「おいそれはどういう意味だ」

……：無い胸を張りながら、青筋立てるお嬢さま。

勝手に勝利宣言を
 それを無視しながら、

「さ、早くお嬢さま。お仕事の時間です。もしなさらないようなら、私もサボれるのですが」

同時に、業務放棄宣言も伝えた——超意訳すると祭の時間が削れます。

「仕事はするわよ!! あなたも祭までには、間に合わせなさい！ ……人選間違えたかしら」

もちろん、お嬢さまの青筋が増えたことは言うまでもなかつた。

†
 †
 †

真夜中、吸血鬼は黄昏たそがれていた。

人が寝静まる時間ではあるが、街では、酔っ払い共がまだ騒いでいた。

人が寝静まる時間ではあるが、黄昏ていた。

周囲に人はいない。

そもそも森の中なので、目に入る場所に家がない。
紅い月を見てボーッとしていると、いつの間にか、隣にローゼが座っていた。
ちなみに、

ここは地元の住人から『お化け樹』と呼ばれる
全長20メートル弱の木の上だ。

5メートル地点の洞うろにある二ルソニア特製秘密基地なのだ。
その洞の前にある木の枝にニルソニアは座っていた。

「あら、早かつたじやない。普段通りならもう少しだけかかると踏んでいたのだけど」
「完璧メイドのローゼちゃんからすれば、あのような仕事、二ルソニア様の——失礼、赤
子の手をひねるようなものです。」

「ねえ、ローゼちゃん。あなたの発言間違いだらけよ？ ちょっとそこの裏まで顔貸し
なさい」

二パア、と満面の笑みを貼り付ける二ルソニア。

空気が張り詰める。

さすが、腐つても吸血鬼。

常人が浴びたら、失神する威圧を放っている。

が、10年間いじり続けてきた完璧メイドローゼちゃん（自称）には、効かず

「お断り申し上げます。結果は分かりきっていますから」

と、なめた口をききながら、いつの間にか用意していた酒を傾ける。

「ローゼ、それは？」

「今日のために取つておいた、とつておきの安酒です」

「どうして安酒なのよ」

「本番は明日。二ルソニア様のお誕生日ですので」

「ああ、思い出さないようにしてたのに」

「……ニルソニア様？」

「なんでもないわ。それじゃ明日のお酒は期待していいのね？」

「ええ、もちろんです」

笑いあう二人。

いつの間にか険悪な雰囲気は消えていた。

数秒後、

何事も無かつたかのように、差し出される手。
恭しく酒をグラスに注ぎ手渡すローゼ。

なみなみに注がれた酒（ワイン）

スーツと細まる緋眼。見事なジト目を醸し出して いた。

「どうして、水面が盛り上がるほど入れて いるのかしら？」

「あ……申し訳ございません」

「ただただ
只々心ここに在らずだつたようだ。素で気づけなかつただけだつた。悪気はなかつた。いいね。」

手を少しプルプル震えさせながら、ワインを零さぬよう、ゆっくり味わう。

心地よい風が吹き、

「あなたを初めて見てから十年か。早いわねえ。あ、今年も契約更新しなきやね」

感傷にも浸る。

「あなたの仕事のおかげで、私は生活出来て いるからね。また、1年よろしくね、ローゼ」
ローゼを横目で見て笑みを作つた。

「承りました。ご主人様」

メイドは、かけられた言葉に目を閉じ、深々と頭を垂れた。

だが、神妙な態度も長くは続かず、

「しかし、お嬢さま。領主の仕事といつても、実際は町の役人頼みで、類の処理だけじや

ないですか』

お嬢さまニート疑惑にメスを入れた。

二ルソニアは、肩の位置まで手を上げ、

「人間のことは、人間に任せてるだけよ』

やれやれと、オーバーアクションを取つて誤魔化した。

そんなたわいも無い会話が続していく。

夜が更けていく。

† † †

紅い月は、水平線に沈んだ。

後片付けも終わらせ、ベットに入る口一ぜ。

自分の部屋の天井をボーッと見あげ、思う。

二ルソニア様は、私のおかげでやつてこれたなどの節をおしゃつていたけれど、とんでも無い。

私はあなた様がいなければ、こうして思考することさえ出来なかつたでしよう。私が救われているのです。

私は、

十年前、私を買って頂いた、

いや救つて頂いた恩返しがしたいのです。

今だつて、私を縛りつけてくれていらっしゃる。
なのに……なのに……、

二ルソニア様は何も教えてくれません。

何も探させてくれません。

何も知らないから、分からないから、

許してもらえないから、何も、何も出来ないです。

ただ、寂しそうなのだけはわかります。

それを紛らわせようと、イタズラを仕掛けたり、

馴れ馴れしい言葉遣いをしてみたりしているのですが、
ニルソニア様は私にメイドとしてしか求めていません。

喜んで貰えることを出来るのが望ましいのですが。

……何がいいのかサッパリわからないのです。

私はどうしたらしいのでしよう……

祭は、お開き。

日課の日記を書いて寝る。

人間が起床してくる時間に、ニルソニアはベットに入りこむ。

吸血鬼の『夜』がくる。

微睡みに沈んでいく意識の中で、

(また一年、たつた。わたしはやつぱり一人。ずっと一人。今まで、これからも)

例年通りの言葉を吐く。

完全に墜ちる前、

例年とは違い、

黒く昏い闇の底と、紅い月が照らす空の上で、
『ナニカ』が囁つた、気がした。

プロローグ

プロローグ　（人嫌い）

血汁によつて生まれた汚れは、新雪の如く白い柔肌を彩る装飾品に成り下がつた。その髪は、埃と泥に塗れたこの奴隸市場においても、白銀の艶やかさは失われなかつた。

すだ袋に穴を開けた程度の貫頭衣では、しなやかな肉体の線を隠しきれていなかつた。

その目は、何も映していなかつた。

暗き海のようなその深蒼には、
唯々内から湧き出る失望が浮かんでいた。

周囲の物には目もくれず、責めるような、凍るような、蔑んだ視線を者共、否、と
物共も
にくれていた。

檻襷雜巾と間違えられても可笑しくない服も、

痛々しい手枷足枷さえも気にならないほど、美しい存在だつた。

それ故に、

周りの者は、不釣り合いな眼に視線を引き寄せられ、覗き込み、背筋に悪寒を走らせた。

否、背筋に剣を差し込まれていた。

その瞳に飲み込まれた時、私はそいつの運命を決めた。

†

†

†

プロローグ　人殺し

ああ、分かつていたさ。

それでももう少しだけ、一緒にいたかった。

結局君が心から望んだものは、どれ一つ成し遂げれなかつたな。
ああ、どうしてだろうな。

俺は時間が有限であることを知つていたのに。

幸せが失われることがないと思つていただろうか。

そんなもの、嫌というほど、

それこそ地獄のような光景を見てきたというのに。

ああ、寒い。もう感覚だつて止まつてゐるはずなのに。

君の好意に甘えていただどうか。

君が好きな俺は、そんな俺じやないだろうに。

嗚呼、走馬灯なんて、見せないでくれ。

生きたい。

生きて君のそばに、なんて馬鹿なことを思つてしまふ。

手遅れなのに。

もう叶うこと、願うことすら無いというのに。

俺が零れ落ちて、消えていく。

……前言撤回。

願わくば、

もう一度だけ、少しで、いい、泣き顔ではなく君の笑——

……あれ、なんだつけ……

そして、女神は一部始終を観ていた。

プロローグ　人でなしく

「えつぐ、ひつぐ、……どうしてこうなるのですか？」

少女の声が響きわたった。

今、少女は、薄暗いの檻おりの中にいた。

モツフモフのウサミミをへたれさせて。

少女は何故囚われの身になつたか、シクシク泣きながら思い出していた。

数日前、少女は生まれて初めて街を訪れていた。
故郷の森での生活が全てだつた少女には、
大勢の人々が行き交うメインストリート、

悠々と闊歩かっぽしている馬のいななき、

露店の呼び込みと漂つてくる香ばしい肉の焼ける匂い、
大きな街にはよくある薄暗く怪しい路地裏。

街の全てが、何もかも真新しいものなのだ。
ゆえに、そう、故に、

少女の行動は、

あつちへキヨロキヨロこつちへキヨロキヨロと、おのぼりさん全開だつた。

屋台の匂いに惹かれたりもしたが、如何せん知らない料理ばかり、擧句に先ほどから漂つてきていたる香ばしい匂いが兎肉だと分かつて、ウサ耳が逆立つた。

だから、見慣れた野菜（ニンジン）が並んでいる八百屋の前で足が止まつたことは、
何も不思議なことではなかつた。

店の前で立ち止まつて品物を見ていると、

怖ぬえ——強いか——嚴いかつい顔の店主が声をかけてきた。

「よう、娘ねえちゃん。見ねえ顔だが、ひよつとしてこの街は初めてか？」

店主は、普段通りの顔をしているが、そんなことは知るはずもないウサミミは、

「ひつ、ひい。売り飛ばさないでください～」

と、涙目、いや泣きながら、この胸の果実は見逃してください、と頼みこんだ。
「娘《ねえ》ちゃん、実は結構余裕あんだろ。怯えなくて、^{おび}売つたりしねえよ。で、買
うんだつたら早くしてくれねえか？」

りんごと桃のような果物を購入して、店主に礼を言うウサミミ。

列が大きくなつてきたから、立ち去ろうと店に背を向けると、

「ああ、そうだつた。この頃、人さらいが増えているみてえだから、気いつけろよ」
娘《ねえ》ちゃんのような美人の亞人が狙われてるみてえだからな、と忠告してくれ
た。

見かけによらず、優しいのだ。見かけによらず。

「大丈夫です。わたし森育ちなので、危険とか毒とか探知できますので。ありがと
うござります～」

と返事をして店を離れた。

少し歩くと、路地裏からいい臭いが、少女を誘つてきた。
にお

それに釣られてフラフラと歩いていった。
危険とかは察知できるはずの彼女が、薄暗く怪しいと感じた路地裏に吸い込まれてい
く。

† † †

次の記憶は知らない天上（鉄製）だった。

言わんこつちやなかつた。
さらわれたのだつた。

「出ろ」「ファ!? ッツ?!?」

いきなり、

低く野太い声をかけられたウサミミは、
檻の天井（鉄）に頭をぶつけ、涙目で蹲うすくまつた。

声をかけた男は、
悶もだえているウサミミには目もくれず、

首輪の紐を引っ張り檻の外に出した。

その日、人に言えないペットを買いに来た人々は、とてもあざとい、もとい保護欲がドバドバ出る光景を見た。涙目のウサミミ少女が上目遣いで震えているのだ。

それも、土や泥で汚れて。

全員が守つてやりたい、抱きしめたいと思つたようだ。

ペットにして、一緒に遊ぶつもりで来た紳士たちだろうに。もつとも、一人だけ別の感情で満たされているようだが。ウサミミが隣に立つきつきの男にこづかれて、

お客様に対する顔がよく魅せられるように、

その場でゆっくり回らされたとき、

爛々と加虐心に輝くメイドと
目が合つた。

2 悪夢であるものとこれから悪夢になるもの

ローゼは夢を見ていた。

この屋敷にやつてきた頃、よく見ていた夢だ。

詳細も朧気なおぼろげ夢だ。

遠——て——く——屋、

暗——窓——い部——、

夜通し聞——え——て——る少——の——えぎ声、

むせ——るほ——の——臭——鼻をつ——

恐——に響——吠——、

かい——プの味、

幸——そ——な——供達——笑——、

肌——焼——炎——氣、

向け——た恨——の視——、

憎惡——眼——映——人々、

——ざ嗤——う人、ヒト、——

死にかけの少女が、血にまみれた手をわたしのほおにあてた。

生暖かい風が頬(ほお)を撫でる。

むず痒い感覚によつて目が覚めた。

目蓋を開けると、見渡す限り草木が生い茂る深い森だつた。

ローゼは、その光が差さない森を一直線に切り開く道の上に立つていた。

私はお嬢様の寝顔(なんのう)を堪能して、ベットに入つたはずでは無かつたか。

私は、確かにパジャマに着替えたはずだが、何故メイド服でいるのか。

などとつらつら考えていたが、今までは埒が明かないと思い、歩き出した。

不自然に森を貫く道は、後ろ側にも続いていた。だが、迷うこと無く足を前に出した。

進むたび、背後で風景(テクスチャ)が崩れ落ち、足下や周りはだんだんと見えなくなつていつたが、進む足取りはメイドらしく瀟洒で、確かなものだつた。

どれぐらい経つただろうか、

時間の感覚が麻痺してきた頃。

知らない見知った屋敷が、道の前に、いや虚空の上に浮いていた。
知らない訳はあまりにも普段とかけ離れているからだつた。

何が？ 何が違う？

分からぬ。 何処がどう違うかは分からぬが、
ただ一つだけ、

あの場所にはお嬢様はいぬ。

そのことだけは分かつたローゼ。

吸血鬼がいられる場所は、生きていくる場所はあの館しかない。
自分を救つてくれた主が、いるべき所にいぬ。

その事実だけで、ローゼは焦燥に駆られた。

正常な判断ができない状態になつた、といつてもいい。

あの屋敷の中には、主以外の何者かがいる。

ローゼにとつて、それは予想ではなく確信だつた。

主がどこにいるのか、などその他を聞いたために、覚悟を決め、優雅でおどろおどろしい門を抜け、莊厳で頼りない玄関の大扉を開けた。

† † †

通常エントランスがあるはずだつた場所は、空白で真っ白だつた。

エントランスだけではない。

辺り一面真っ白で、入つてきた大扉さえ白く同化し分からなくなつていた。
そんな白く、だだつ広い空間になんかいた。

黒いモヤみたいなものが集まつて、人型を作つていた。
だが禍々しさはなく、コミカルな印象すら与える造形だつた。

具体的には



/ 1 \

1

棒人間だつた。

生き物とは断言できない人間と目が合った、気がした。

目が本来あるはずの場所、眼窓こと目が存在していないが。

目をそらしたら負けだ、という言わんばかりにずっと睨み合う2人（？）。

「なに？」お前は初対面の人の鼻を睨みつけるのがマナーだと思っているのか？』

『残念！ ローゼが睨みつけていた所は鼻だつた！ つまり棒人間の不戦勝！

棒人間は口もないのにヌケヌケと抜かす。

「ああ、すまない。子供にはまず椅子をすすめるのがマナーだつたかな？」

「いえ、進められた椅子に座らないのはマナー違反になるので、ちょうどよかつたです」

「では、その丸太に腰かけるといい」

† † †

「この後、長い間こんなやり取りしてたのでカットです。それにこの時の棒人間さんは煽りスキル低いので……。いつの間にか勝手に丸太出現してるし」

† † †

何を言つても皮肉にして返してくる棒人間。

長いこと言いあつていたローゼには疲弊の表情が浮かんでいた。

「さて、もういいだろう。腰でも落ち着かせて実のある話し合いをしようぜ」「ええ、あなた（？）には答えてもらうことが多々ありますからね。だから腰を落ち着け

て話すことは賛成です。が、その肝心の椅子はどこにあるのでしょうか」

「そこにあるじやん」

「丸太は椅子とは言いません」

「いやどこ見てんの?」

漂白された空間にいきなり円卓と椅子が現れていた。

「どうした? 傾が豆鉄砲食らった顔して。いや、すまん。デフォでその顔だつた」

ローゼにしゃべる隙を与えて、続ける。

顔に各パツは無いけれども、衝動的にぶちのめしたいと思わせるウザさだった。

殴ることは後でもできる、今は情報の確保が最優先です。

と、ローゼは自分に言い聞かせながら拳を握り、我慢する。

「それでは一から説明してもらいましょうか?」

「そうだな、どこから話そ――。……悪いな。答えられることは一つだけになつた」

「全て話せなどには応じられない。具体的には、一から、説明して、もらいましょうか? とかな」

「ならば、あなたの正体を」「さつきの会話が1回分だ。だから先に言つた――悪い

な

口一ゼの発言を遮り、
ひょうひょううそぶ
飘々と嘯く。

「願い事は吸血鬼が眠る部屋——その隣の仕事部屋にある両袖机。左側下から二段目の中から始まる」

口一ゼは何か言おうとしたが、
棒人間の黒い笑みを見てしまい、無意識に口をつぐんだ。
それが後から思えば間違いだった。

「さて、情報は絞れるだけ絞られだし（笑）、お前、ほかにやること残つてないか？ 何
か我慢してないか？ 例えば俺を殴るとか」

口一ゼのまゆが一瞬ピクッと動く。

円卓と椅子が、元から無かつたかのように消える。
「殴りたかつたらどうぞ、ただし殴れたらな（笑）」

純白の部屋の中、棒人間は笑みを深め、

「ほら、どうしたんだ？」

煽る

「フルボツコにするんじゃなかつたか？ んん？」

煽る

「まあ、でも？　たとえ万が一、億が一、殴られてもそんな小枝のような腕じや痛くも痒くもないな。あ、いや、痒いか。蚊に刺された——吸血鬼に噛まれたぐらいには」

煽る

ローゼは、もう一度拳を握りしめた。

今度は殴るために。

拳からは血は出ていないが、時間の問題だつた。

親愛なる主人を侮辱した罪は重い。

それこそ、ローゼが言葉を忘れる程に

「——ツ！」

人ならざる言葉と拳を持つて、黒々しい棒人間に飛びかかつた。

3 主神と女神と棒人間と

唸りを上げるメイドの攻撃をヒヨイギリ避けながら、いぶか謝しむ棒人間。
こんなでいいのかよ。気の向くままにやつてみたが。

——つて危ねえ！　かすつた。

人が出せる出力じや無いんだが。あのメイド、狂戦士『バーサーカー』か。魔法でも使つてる訳じやあるめえし。

心の中で一人つぶやく。返事がないはずだつた。

が、問い合わせに声が答えた。

? 引き出しのことを伝えられたならば、それで良い。あと其奴は、身体強化魔法
『バーサーカー』を使用している？

頭の中に直接声が響く。

だが棒人間は、それに少しも動搖せず念じた。

(いじりがいがある女神サマジやなくて、あんたか)

?……あと10分持たせろ？

しそうがねえなあ、わかつたよ……これ一発でももらつたら俺、死ぬんじやねえか

?

まあ、当たらなければどうということはないか

† † † †

時は幾許か巻き戻る。

† † †

「……—さい」「—きなさい」「おきなさい」

誰だよ、俺を呼ぶのは。

……真っ暗じやねえか。

あ、目閉じたままだつた。

目え開けるわ。

筋肉ムキムキでパンツ一丁のマツチヨメンにブーメランを取る、胸筋を強調するボーグ変態だつた。

待て待て、おかしい。混乱している。

ブーメランパンツ一丁で胸筋を強調するポーズを取る、筋肉ムキムキのマツチヨメンの変態がいた。

……おやすみ、ちょっと深淵の向こうに旅立つてくる。

「え。ええ!? ちょっとまって。待って、待ってください!」

あのマツチヨが喋つてるとと思うと気色悪いほど可憐な声だな。
でも、待たない。待てない。

俺はもう…………なんだ?

まあいい。忘れるようなものなら大切じゃないだろ。

じやあお休

「ねえ、起きてつてば、目開けてつてば、ねえ」

うるさいなあ。わかつたよ。

はあ、うん、やつぱいるわ。

あの変態マツチヨ上腕二頭筋を強調してやがる。

なんかよくわからない汁で、テカテカ光つてやがる。

目がヤバい。

このままだと腐る。腐り落ちる。
目の保養ができるものはないか。

……あつたわ。

変態きん_にマツチヨの隣にあつた。

気づくはずないだろ。

『アレ』見ないようにしてんだから。

このままだと目がやばいから、もちろんガン見一択。

ジー。ビクツ。

艶やかでなまめかしい光沢を帯びる黒い着物を纏まどつた、
まだ幼さが残る顔立ちの芳紀ほうき——美しく若い女性がいた。

ジー。ソワソワ。

年は十六、十七歳ぐらいだろうか。

ジー。オドオド。

さつき、声をかけてきたのは、多分こいつだ。

こいつであつてほしい。

うーん、さつきからオドオドしてゐるな、小動物みたいに。
それに比べて、あの背筋を強調してゐる筋肉ときたら……

こうなつたら、

あの小動物をオドオドさせ続けるしかあるまい！

ギヤアアアアアアアア!!

キンニク、シャベツタアアアアアアア!!

マジかよ。ああビツクリしたわ。

でも、『アレ』に驚かされたと思うと、少し癪に障る。

ええい、報復だ。

「おまえ、頭の中までの筋肉たっぷりかと思つたら、存外喋る程度の能はあつたんだな」ツブ。

ん？ 今、誰か笑つたか。

1人と1匹は笑つてないな。もう1人いる？

：暗幕の向こうにいるな。

笑いこらえてやがる。羽がある。頭に輪つかさえついていやがる。ありや、天使か？だとすると、この1人と1匹は神様か？

ともかく、あいつとはい酒が飲めそうだ。

……待て。暗幕なんてはじめからあつたか？

……筋
名状したくないナニカ
肉のせいで、

記憶があやふやになつていやがる。

？天使はもういない。移動させた。装内——内装は勝手に変わる。気にしない方がいい？

「お父様！！ 脳筋と言われた事をお気にかけてください。配下の天使に笑われたこと

もです！ いくら脳味噌が通常の3%しか動いてなくとも、それぐらいはお願ひしますよ!!」

親子かよ!!!
マジか。

どうやつたら『アレ』から、この女神ができるんだ。人間の神秘だな——人間かあれ?

まあいい。それよりも、

「それ、脳筋つて認めてるようなもんだぞ」

親族公認で脳筋て……。

「そうで、しようか? つて、そ、そんなどうでもいい話をしている場合ではないんです。」

自分の親が脳筋疑惑はどうでもいいのか
「無駄話をする時間は創つていませんから」

? どういうことだ。

”時間がない” では無く、”用意をしていない” とは?

「説明は後です」

……さつきから、ちよくちよく思考をナチュラルに読んでくるな。お前ら。
えつ、なに、これ聞こえてんの？

「ええ、聞こえてますよ」

ヘーヒやあキツツイ下ネタ考えよ

二
七
?

ハハツ。

見事なほどに、ゆでダコみたいに赤くなつてらあ。

下向いちやにてえ

で、時間がねえんだろ。ほら、はやく主題に入れよ。」

「だったらそんなこと言わないでください!!」

「俺は思つただけなんだけどねえ。どう思います? クソ脳筋】

? 我が娘ながら、やはり可愛い?

……話題が少しズレているが、あんたともいい酒が飲めそうだ。言うまでもなく、肴は

あの娘さんだがな

さつきまでは、散々言つて悪かつた。

…クソ脳筋には触れないのか

しかし、

実の娘が困つて いるところを見て、 可愛いとはなかなかいい性格してんな、 親父さん。 「困らせて いるのはどこ のどなたですか!!」

「お前の親父じやねえの?」

「いいかげんにしないと、 怒り——」

「どこつて、俺はここがどこか知らないし、そもそも俺誰だ?」

「その説明をしようとするたびに邪魔してくるじゃないですか?!」

「俺の覚えてる限りだと1回こつきりな気がするんだが、まあいい。」

「手足の先端が光つて るし、 感覚がないから手短に説明頼む。」

「ああっ!? 馬鹿なことをお二人がやつて いるからタイムリミットが!
すから、一番重要なことだけ尋ねます!」

馬鹿なこと、ね

「あなたは生まれ変わりたいですか?」

「いや、いい」

「えつ?」

後で説明しま

4 いわゆる（作中キャラに対する）説明回

10分間ぐらい、メイドの拳を避けて続いていると唐突に彼女の姿が消えた。

† † †

（棒人間視点）

さて、メイドとたわむれたり、次は何をすればいいんだ？
えと、あいつはなんて言つていたかな。

それにもしても、あいつあんな仕事できるやつだつたのか？ どうにもそんな印象がないのだが。

（失礼な。あなた方が馬鹿な事をするから、手に負えなかつただけです。）
うお、女神か。ビックリした。こいつ頭に直――

（天井はもういいですから）

（もつかい赤面せんぞ

（なぜなのですか、そのネタへの情「 その話、詳しく!! 」 熱は――へ? ）
「誰だ。と思つたらさつき噴き出してた天使？ じゃねえか。どうしてここにいる？」

（その天使にはこれから的事を説明させます。では、私はこれで）

「おい。名前ぐらい教えて行けよ」

「そういえば、私も知らないですよね」

「なんでお前も上司の名前知らないんだ……」

「それはですね、私があなた様達の観^s——サポートの為^{ため}に産み出された存在だからですよ。良かつたですね。生後数時間の天使を好き勝手出来ますよ」

「俺にはそんな趣味ねえよ。なんだ、してほしいのか」

ボツ

「顔赤らめんな。あと、擬音がゴンさん仕様なの見逃さねえからな」

（あの……私の名前……聞くんじやないんですか？……）

「ああ、そうだつた。そうだつた。教えてくれよ。親父さんの名前も」
（分かりました。私、冥界と月の女神ヘカミユルナと言います）

（お父様は、名はありません。）

（家名だけあります。フルレウスと仰^{おつしや}ります。ちなみに最高神です）

（あれで最高神……）

「滅ぶな。この世界」

「滅びますね。この世界」

「お前も同意するんか、天使」

(――― それでは、失礼させていただきます)

あ、逃げた

†

†

†

先ほど、メイドと鬼ごっこをした何もなく真っ白い空間の中で、天使と棒人間が向かい合っていた。

「えー、それでは、わたくし 私 不肖ナレーショナーが司会、もとい説明をさせていただきます」

「まず初めに、娘さまや我らが父とは違い、私ご思念は読み取れません。あしからず」

改めて、自己紹介をした天使ナレーショナー。太ももまである長い金髪。ゆるやかにカーブしたそれを頭と共に下げた。

その動作を受けた棒人間は、怪訝な表情になつた。

「お前、そんな堅苦しい奴だつたか？」

天使は、問いかけに頭を上げた。

「いえ、これは形式美つてやつですね。一応この説明を始めるときは、このようにしゃべるのが伝統なので。」

「そういうもんか。なんか似合わん。違和感がすごい」

「そういうものです。私も何かしつくりきません」

天使は閉じていた翼を拡げ、続ける。

「仕事に戻りましょう。説明を始めます。――さて、どこから話したものでしようか……」

少しの間、逡巡^{しゅんじゅん}していたが、話す内容を決めたらしい。

天からの使いは棒人間に

「あなた様は召されました」

と、さとすように告げた。

それを聞いた棒人間は平然と

「そりや、神サマがおわす場所に行つたんだ。死んでなきや^{行けねえだろ}いけねえだろ」

その台詞に何か察するものがあつただろうか、

天使はもう一度頭を下げた。

「申し訳ございません。記憶を無くしていらっしゃることを忘れていました」

天使の言葉に驚いていたのは、当の本人だつた。

「俺、記憶喪失なのか?……あの女神さまがポカやらかしたか?」

驚きが過ぎ去つたあと、責めるようになすねるが、ナレーショナーはどこ吹く風。

「その点はあなた様の性質のせいですか、娘さまのせいにしないでください。それとあなた様を転生させたのは、我らが父ですよ」

たんたんと事実だけを述べる姿は、確かに天使のそれだつた。

「筋肉の弊害か？」

だが、あきらめない棒人間。天使の揚げ足を取りに行く。

† † †

「こう書かれると私の足が美味しそうに感じますね」

† † †

「力技の影響は、否定できかねます。ただ、それよりもあなた様の特性が大きく関わっています」

嘆息しながら、ナレーショナーは棒人間に向かって歩き始めた。

「ですから」

天使は続ける。いや、続けようとした。

だが、口から出てきた言葉は、

「——はあ、分かりました。この喋り方やめますからその顔やめてください。顔ないのに変顔するとかどうなつてるんですか？」

「何となくできるかなーと思つてやつてみたらできた。——この体に慣れてきている自

分が嫌だ……」

「じゃあ、さつさと仕事、説明終わらせて下界に遊びに行きますよ」

一方そのころ。

最高神とその娘が一話のニルソニアと同じ理由で頭を抱えていた。

すなわち

「人選間違えたかな」

と。

実際には、仕事モード、つまり他人行儀が嫌だつただけで、仕事は好きなナレーショ
ナーであつた。

†

†

†

『この小説を編集しているのは…………自作自演』

「あ！ 言わなければバレないものを！」

†

†

†

「説明の続きとまいりましょう！ えっと、どこまで話しましたつけ……

あ、上司があなた様を転生させたところでしたね。」

「そうだつたか？」

「そうなんです。それで何故上司があなた様を転生させたかというと、

『暇だつたから』だそうです」

「筋トレでもしとk……いや、あれ以上マツチヨになられても困るか」

「今回の案を思いついたのは、筋トレ中だつたそうですよ」

「もう筋肉だけになれよ」

「嫌ですよ。最高神がナマコとかタコの仲間なんて」

「触手の神……それなんてクトゥルフ？」

†

†

†

「えーと、どこまでいきましたつけ?ま、いいや。途中から行きますね。」

「天界はだいぶ暇ですから、物語などは何十回、何億回も繰り返し読み、食傷されたよう
で。そこで、話を自ら作り上げようと、たりない頭で――失礼、物足りない頭で考
えたそうです」

「で、俺をつかつて話を作ろうつて魂胆か?」

「いえ、少し語弊があります。あなた様にやつてもらう役は主役ですが、自由にやつても

らつて結構です。

あなた様は引っ搔き回すこと好きでいるようですから、その方が面白くなると判断しました」

「独断か？」

「……まあ、独断に近い形ですね」

それを聞くと、棒人間。背筋を伸ばし、敬礼した。

「ありがとう。今まで楽しかったぜ」

「いや、消されませんから」

「そうなのか」

「ツチ

「今、舌打ちしましたか？」

「そんなことより、説明の続き」

「どの口で言いますか。……娘さまもこんな気持ちだつたでしょうか」

ナレーショナーは気合を入れ直すように頬を両手で、パシッと軽くたたいた。
それを見て棒人間。

「蚊でも止まっていたのか？ 大丈夫か？ かゆいか？ ム〇はいるか？ 液体タイプと軟膏タイプがあるぞ」

と、言いたくなつたが、ガマン。空気は読めるのだ。わざとシカトするが。

† † †

「言わなくて正解でした。かけらも面白くありません」

† † †

そんなことは、つゆも知らずナレーショナー。

「それでは説明の続きです。

あなた様がひつかきまわしたメイド達の日常を私がまとめ上げ、上司に提出します」「レポートみたいなものか？」

「言い不得て、妙ですね。提出したものが面白かつたら、名前を頂けますし」

「そのなんだ、ナレーショナーは名じやねえのか？」

「なんて言いましょうか、役職です」

「つまり、課長とか部長とか、で呼ばれてるわけ？」

「おおむねその通りでござります」

と。唐突に、腕を組み頭をかしげるナレーショナー。

「何か忘れているような……、あ」

「どうした」

「二つ伝え忘れておりました。まず一つ目は、頑張つたら元の世界に戻れるそうです。」

「今俺にはそこまでメリットではないな。それで二つ目は？」

「二つ目は、このままですと、転生後、正確には下界に降りてからの肉体が」
ナレーショナーは一旦口を噤み、

「棒人間で、確定します」

「ちよ、それは、マジで勘弁してくれ。どうやつたら回避できる」
ナレーショナー、につこり笑顔。

「孕んでくださいませ」

「……………」

ん????

5 『夜』のメイドさん百面相！

十分間にも及ぶ大戦闘（笑）のすえ、棒人間を一発も殴れなかつたローゼは、気づけば自室のベットに横たわつていた。

脳裏に映るは、

己の拳を樂々避けながら別れの歌を熱唱する棒人間の姿。

「付け加えると、この歌は某心のボツチ度に比例して、バリアの強度が変わる新劇場版ロボットアニメ二作目の挿入歌です。『翼をくださりませんか』とは別の曲です」b y ナレーショナー

「この程度だつたら、楽曲使用使わなくともいいですかね？」
「わかりかねます」



ちなみに、今はまだ朝の11時。昼夜逆転の生活を送るローゼには、つらい時間だ。

「夢か……悪夢だつた」

どうやら夢落ちにするらしい。

確かに服装はパジャマに戻っているが、

汗ばんだ肌^{はだ}、上氣した頬^{ほほ}、そして何より未だに発動している身体強化魔法が、現実

であることを物語つていてる。

「思いだしたら、また腹が立つてきました。ええ、夢ですけど腹が立つてきました」

怒りがふつふつと湧き上がる。10秒前。

「次会つたら、どうしてくれましょうか」

8

「腹パン？　いやいや生ぬるい」

6

「金的？　一撃で終わらせてしまつたらいたぶれない」

4

「そもそも男かどうかすら怪しい」

2

「……ああ、こうすればいいよかつたじゃないですか」

長めのマクラにまたがり、拳を振り下ろす。

「こうすれば、避けられない」

1秒前、噴火はまぬがれない。

「あの野郎、つまようじ爪楊枝の分際で避けるな！ ニルソニア様を罵倒した

んだ!! ボツコボコにぐらいなれ!! なれないのなら死んで詫びろ!!」

メイドにあるまじき言葉づかいで、罵詈雑言をまき散らす。

それでも收まらないのか、マクラを殴る。殴りつける。殴打する。

ローゼがこうなつたのは、理性を蒸発させる身体強化魔法の弊害かもしれない。
――本人の本性かもしだれないが。

†

†

†

「はあ、はあ、はあ、」

息が上がるまでに至つて、ようやく落ち着いたローゼ。

ただ、マクラに対してマウントは取り続いているが。

女性といえども強化された拳にさらされたマクラは、ボロボロだつた。

「私、夢の中の相手に何をムキに。……あゝあ、マクラが。お嬢様に叱られる」
大きく深呼吸。

気持ちを落ち着けている最中に、ふと、疑問が頭をよぎった。
あの爪楊枝が唯一意味のある情報として渡してきたものだ。

「願い事がニルソニア様の机から始まるとは、一体どういう事でしようか？」
夢だと思っている上に、棒人間あのヤロウの言つたことなので、信用も期待もしていない口一聲。
だが、気になるのは事実だ。

「……確認だけしましょーか」

葛藤したあげく、確かめることに決めた。引き出しに入っているであろうナニカを。

さつそく着替え始める口一聲。

その間、数十秒。

やはりできるメイドなのだろうか。……今から行おうとしていることは、主の部屋に
押し入り、ブツを物色する寝入り強盗に近いが。

歩きなれた廊下を進む。行き先は主の仕事部屋だ。
ニルソニア

「——『願い事』。引き出しに入っているなら、物質でしょう。……いつたい何が入つて
いるんでしょうか?——しかし始まるとも言つていました。物質ではないのでしょうか?
か?」

何が入つているかについては、棒人間も知らなかつたりする。ナレーションナーも知ら
なかつたりする。

†

†

†

「[削除済み]さん……棒人間に指示を出されたのは娘さまなので、私も「削除済
み」さん……棒人間さんも、よくわからぬんですね。

あの引き出しどうなつてているんですか。アカシックレコード虚理演算で解析できないんですが。

……よほど見られたくないナニカが入つてゐるみたいですね。私、気になります!!」

b y ナレーショナリ n 記録室 o n 天界

†

†

†

色々思案するうちに、部屋の前にたどり着いたローゼ。
神妙な顔つきでドアノブに手をかけた。

仕事部屋、正式名称：業務室には、^{入り方}が二通りある。
直接入るか、ニルソニアの部屋から繋がる通路を使うか、の二通だ。

しかし、直接入るルートは使えない。扉が開かないからだ。
何故か。

それは、書類が至る所に積まれているため。

領主の仕事を人任せ、人間任せにしているニルソニアお嬢さま。

彼女が破棄していい書類など分かるはずもなく、書類は床に平積みなのだ。
某左手がサルで変態な女の子の部屋みたいなひどい惨状だった。

レインコートの似合う後輩の話はおいといて、

仕事部屋にはニルソニアの部屋を通つていくしかない。

そのことに気づくまでかれこれ十分間『開かずの扉』と戦つていたローゼ。

口一ゼは、

「確認するの、やめましょうか」

疲れていった。

6 日記

ローゼは気を取り直し、彼女の主——ニルソニアの部屋へと向かつた。

図らずとも、昨日主あるじ——ニルソニアお嬢様を起こしに来たときと同じ体勢で固まるローゼ。

ただひとつ、ローゼが不安げだという事を除いては。

「罷だつたらどうしましようか……いえ、どうせあいつの戯言です。さつさと確認して（お嬢さまの）ベットに入りましよう」

神妙な顔つきで、ドアノブに手をかけた。

ドアノブは音もなく回った。

部屋に入ると、当然ながら天蓋付きのベットでニルソニアが寝ていた。
床には、脱ぎ捨てられ散らかつたお嬢様服。

普段から身の回りを任せきりのお嬢様。生活力は皆無だつた。

普段通り、無意識に服を回収していくローゼ。

そして、普段と同じく気配を殺している。

気配を殺しているため、ニルソニアが起きそうな様子はない。

後で本人から聞いた話だが、『お嬢さまに悪戯するために、努力しました』とのこと。さすがは、駄メイド。いや、もはやメイドですらないかも知れない。

回収した洗濯物（お嬢様の服）を部屋の隅にポイッと投げ捨てる。

「これで足の踏み場が出来ましたね。——おつと、お嬢さまは寝ていました。静かに……静かに……」

忍び足で、業務室へつながるドアへ歩いていく。

普段通りに、ニルソニアが起きる事もなく、そして何事もなく、ドアの前に着いた。

今回もドアノブは滑らかに回った。

静かな業務室は相変わらず散らかっていた。主に書類が。

ただ、ドアから業務用両袖机りょうそくばくえきまでは、動線が確保させていた。ローゼは、周囲を紙に埋め尽くされた道を進む。

積み上げられた白い塔に当たらないように慎重に進む。

「まつたく、お嬢さまを起さないことよりも、書類の山を崩さない方が難しいとは」愚痴りながら、たどり着いた両袖机の右側、下から二段目の引き出しを開く。

そこには

「ん？」

何も入っていなかつた。

「やはりからかわれた、いえただの夢だつたようですね。ならばさつさとニルソニア様と共にベットで寝——」

ガチャリ

棒人間は何と言つていた。

『願い事は吸血鬼が眠る部屋——その隣の仕事部屋にある両袖机。左側下から二段目の中から始まる』

そう言つていた。

音がした。左側の引き出しから音がした。

業務机の備え付け引き出し、左側、下から二段目、その引き出しが、ローゼには、何故だか鎖で縛られているような気がした。つばを飲み込み、だが静寂に飲み込まれないように、腕に力を籠め、だが期待は込めないように、引き出しを開ける。

——どこかでナニカが晒つた——

そこについたのは、

一冊の古ぼけた黒革の手帳とゼンマイナ薇発条の切れたオルゴールだつた。

手帳の表紙には何かが刻まれた跡と、大きくなつてゐる二つの。望んだものと告げられたそれを覗き込んだ。

それは

†

†

†

手帳——日記を丁重に閉じる。元あつた場所に戻すと、ローゼは泣きそうな、それでいて決意したような顔でオルゴールの發条ゼンマイを巻き、机の上に置く。

流れてくるは、美しく氣高い、だけどどこか寂し氣な旋律。

その旋律は、この場に動くものがいな夜であることも合わさつて、高らかに鳴り響あ。

今にも消えそうな音は、屋敷中に響き渡る。

く。

壁一枚隔^{（へだ）}てた部屋にも流れ出る。

バンツ!!!

ローゼが顔を上げると、メイドが見たことない表情で、日記の持ち主——ニルソニアが扉を蹴り開けて、迫つてきていた。

幼子 ～日記の続き～

ニルソニアがローゼに近づいていく。

歩みは走行へ、走行は疾走へ、疾走は疾駆へ。
偶然、階段状になつていた書類を蹴り上がり、
飛び上がり、

空中でローゼの両肩をつかみ、
強張こわばつた顔こめかみに微笑みかけて、
小さな膝ひざを鳩尾おぢおちにぶちこんだ。

鈍い音がした。

ニルソニアは紙を巻き上げ、着地する。

ローゼは紙を巻き込み、後ろに吹き飛んだ。

「今あなたは私の信頼を裏切ったの」

白紙が舞い散る中、吸血鬼は冷たく囁う。

「ローゼ・キュリエイド。この状態から私を納得させる言い分があるなら、言つてみなさい」

最期の言葉を言い終わるや、衝撃があつた。

いつの間にか吹き飛んだはずのメイドが抱き着いていた。

当然、驚いたのは抱き着かれたニルソニアだ。

ローゼを引きはがそうとして、気づく。メイドは声もなく泣いていた。

驚いたのもつかの間、

ニルソニアは日記をメイドに読まれたことを思い出し、

「何よ。哀れみならいらないわよ。それと、離れなさい！」
と、冷たい言葉を発した。

だが、

その願いは、
拒絶

「同情で泣いて”いるわ”けでも、痛みに涙して”いるわけ”でも、あ”りませ”ん。
いた
安堵と、嬉しいのと、少しの怒りが混ざった”嬉し涙です”

ローゼには、届かない。

離れるどころか、抱き着く腕に力を込めた。

『誕生日』に予想外のこと^{日記を読まれ、オルゴールを鳴らされ}が起き、

荒ぶりさきくれ立っていたニルソニアの心は、

知らず知らず、冷静に考えることが出来る程度には、落ち着きを取り戻していた。

それでも、心の奥底^{思出}に土足で踏み込まれた怒りは消えなかつた。
メイドの言つたことを信じられなかつた。

もう一度拒絶しようと、メイドの体を押しのける。

人間はいとも簡単に吸血鬼の力によつて引きはがされる。

ただ、引きはがすときには、吸血鬼は、ローゼの蒼眼を覗いてしまつた。

それだけで、吸血鬼は固まつた。動けなくなつた。拒絶できなくなつた。

――知らぬ間に泣き止んでいた深蒼の眼に感じたものは、哀れみや同情ではなく、本当に純粹な感謝や安堵――

メイドは固まつた吸血鬼に語りかける。

「私は小さい頃に御嬢様――御主人様に救い上げてもらいました。」

「あのとき、御主人様は心身ともに、私を死から掬い上げてくださりました。」

「あのまだつたら、私はわたしではなくなつていたでしょう。」

「今もなお、御主人様は私を現世に縛り付けてくれています」

だから

だからこそ

「御主人様に私の人生をもつて恩返ししたいのです。」

「でも長年おそばにおりましたが、御主人様は、特別なことは何も願わず、何も求めず、お心を私に、明かしてはくれませんでした。」

「お前にできる事は何もない、そう言われているような気分でした。」

「それももう今日で終わりです。」

「やつとやつと、ニルソニア様に長年の感謝を返せます。」

そう独白して、主人の頭を胸にもつていき、優しく抱きしめた。

吸血鬼は、反射的に拒絶しようと、押しのけようとするが、頭から伝わるやさしくて、それでいて少しぎこちない手つきがそれを止めた。

「お嬢様——いえニルソニア様。私はどこにも行きませんよ」

気づいたらローゼの胸に顔を押し付け、

何年ぶりだろうか、

吸血鬼——ニルソニアは大声で泣いた。

その光景は、さながら

母親が子供にするような、、

「それは、シミだらけの日記。
お父様、お母様どこにいるのですか。』

『かくれんぼなら、百年経つても見つけられない私の負けです。』
『ムバ
悪
い
こ
と
な
つ
二
ら
う
ぶ
、
二
反
し
残
く
だ
ま
べ
ミ
。』

『嫌いな人参も食べます。言いつけも守ります。』

『あの日頂いたお母様のオルゴールも返します。』

『日記として使つてしまつてゐるけど、お父様から頂いたこの手帳も返します。』

「誕生日も祝わなくていいです。プレゼントもいりません。」

『だから、だから、だから、だから、いつしょにいてください。わたしをひとりにしないでください。いつしょのおねがいです。』

「わたしは、ニルソニアは——」

この次のページは、メモ——『いつてきます。待つてね』と走り書いているものが

張りつけてあつた。

この続きは、水にでも濡れたのか、にじんで読めなかつた。

もうすぐ、吸血鬼の『夜』が明ける。

第終章 人形たちは嫌い合う Please Rest a r t

8 極限まで取り乱してると口調乱れるよね

「ローゼ視点」

——ふう——。

どうしてこうなった。

昨日は、日付的には今日なんだけど、あんなことやつちやつたし、
早起きしてキビキビ働いて謝ろうつて、覚悟決めて起きてみたら、
隣で全裸のお嬢様が寝ていらっしゃるんだけど。腕に抱き着いていらっしゃるんだ
けど。

ついでに私も全裸。

これ私やつちやいましたか？ またやらかしましたか？

不敬罪+ α で処刑ですか？ 処刑なんて不経済ですよ！ 御主人様！
思いだせ。思いだせ。

何故私とニルソニア様が全裸なのか。

どうしてお嬢さまが私の部屋にいらっしゃるのか。

え、と、あのあと、お嬢さまが泣き疲れて寝てしまわれたので、

お嬢さまの寝室のベットに寝かせて、

私も就寝しようつて、自室に戻ってきて寝た。うん、寝た。

あれ？ 原因が見当たらないんですが？

あ！

夜中……日は既に上がつていましたが……に扉が開く気配がしたけど、それですか？

それですね。

害意が無かつたので無視しましたが、お嬢様だつたのですね。

では、私の服を脱がせたのも、お嬢さま？

つまり、

この状況はお嬢さまが望まれたもの？

……
!!!

ならば、据え膳喰わぬは漢の恥!!!

今の私は漢だ!! 狼だ!! さあ! 愛を育みま——

「——う、ううん、お、かあさ、ま……」

不意に腕を、キュツつて抱きしめられた。

みれば、ニルソニアの表情は安心しきっていた。

何も怖いことや痛いこと、嫌なことは起こらないと、無邪気に信じているような顔
だつた。

……

・・・あーあ。どうしてこうなつた。

こうなつたら、襲うなんてできませんよ。……幼い娘を襲つたなんて罪状欲しくないです。

それに、さつきまでは月が雲に隠れて、よく分からなかつたけど、
今のお嬢様、体、三歳児と同じ。

もはや、赤ちゃん。

私を母親と間違えているのでしょうか。

こんな蕩けきつた顔は見たことがありません。

……ああん、もう。可愛すぎ。

普段は十二歳ぐらいの大きさなのに、

何故三歳児になつているのか、なんてどうでもいい。

愛でよう!! 愛でましょう!!

……これ以上は無理ですね。

支離滅裂な現実逃避をやめて、 口調も元に戻さないと。

愛でるのは確定ですが。

再度、現状把握です。

お嬢さま全裸、ついでに私も全裸……服を着ないと、いくら吸血鬼とはいえ、風邪をひいてしまいます。

服は……あそこでですか。

……お嬢さまが腕から離れてくれません。

仕方ありません。お嬢さまごと移動しましよう。
よいしょ。

…………こんなにも軽いのですか、ニルソニア様の肢体は。
か
ら
だ

† † †

「おはようございます。仕事から戻つたら、ローゼさんが一人悶々もんもんとしていました。」
〔報告もとい、記述担当のナレーショナーです。〕

「さつきまで私、あのお嬢さまの日記を、再度、隅から隅まで、解析していまして。」「この日記、我ら上司が父の力添えがあつても、一筋縄ではいかなくてですね。」

「——何で、神の機密文章が書けるほどの隠蔽いんぺいが為された紙を使って、日記を書いているのでしょうか。あの口り吸血鬼は——」

「まあ、というわけでですね、地の文に割けるメモリというか、キヤバというか、余裕

が無くなりまして、上記のような書き方になりました。」

「いやあ、『空理演算』アカシックコードさまです。ローゼさん視点に切り替えて、出力すればいいんですから。」

「まあ、羽ペンを使って、紙に書き留めるのは、私なんですけどね」

「つて、ローゼさん?! なにしてるんですか?! いくら三歳児でもそれは……あ、満更まんざらじゃなさそうですね。あの吸血鬼」

「見返してみると、ローゼさん、メイドとしては失格ですね。」

「やっぱり、駄目なメイドですね。駄メイド。」

「そろそろニルソニアさん（三歳児）が起きますよ。」

「それにしても、ニルソニアさんは幼児退行がひどいですね。」

「どちらかといえば、あの三歳児モードが本来のお嬢様（笑）な気がしますよ。」

「ひどい惨状になりそうですね？」

† † †

時間は、どうしようもなく、凍結された。

アインシュタインの一般相対性理論は、今この瞬間、破綻した。

全粒子の熱振動は、完全に、停止した。

不確定性原理は、ふざけたことに、意味を成さなくなつた。

ニルソニアには、そういう風に世界が見えた。

無理もあるまい。

彼女からすれば、頭と手に優しい感覚があり、それに癒され安心していたところ、なんだか鼻がむず痒かゆく、そつと薄目を開けて確認してみたら、

ローゼが、否、自分自身がローゼのベットにいて、ローゼに抱きかかえられていたのだから。

ニルソニアの鼻がむず痒かつたのは、彼女の髪の毛が、鼻にかかつっていたせいだつた。優しい感覚の正体は、ニルソニアの頭をなでる真っ白い手と、

彼女自身が咥えるローゼのおっぱいからおっぱいを出しやすくするためにおっぱいを押している己の手から伝わるおっぱいの感触だつた。

想像してみてほしい。

朝目が覚めたら、赤ちゃんプレイされていることを。
 しかも、その相手が、昨晩胸を借りて幼子の様に泣きじやくつた相手だつたことを。
 そりやあ、時も止まる。物理法則も瓦解する。

†

†

†

「な、ななな、何をしているの！ ローゼ!!」

結局、フリーズから復帰するのに11秒かかったニルソニア。

ただし、受け入れも納得もいつていないうで、犯人と思わしきメイドを問い合わせ
 いた。

ち な み に、

ニルソニアは、いまだローゼの胸に吸い付いている。
 よつて、声はくぐもり、声の振動はローゼの胸に直接響く。
 つまり、

こういうことだ。

「……あん♡」

ニルソニアが喋ると、ローゼが喘ぐ。

「あふ……。おはようござります」

「ふえ、口一ぜ。これどうなつてているのかしら？」溝足のいく説明、出来るわよね？」

「いちいち喘がしたら、話が進まないので、省略しています。脳内補正を行つてくださると、有りがたいです」

† † † †

威厳タツプリ、風格マシマシで喋っているが、今のニルソニアの残念な現状では、逆効果。

幼子が背伸びをしているようで、微笑ましささえある。

しかも、

「お嬢さま。満足のいくではなく、満足のいく、または納得のいくですよ」

背伸びした結果、こけてしまつたようだ。

これには、ニルソニアも顔を赤らめる。

「そとはならんやろ」

† † † †

『なつてるやろがい』

【我らが父!^{上司}?】

†

†

†

「た、ただの言い間違いよ、言い間違い。そ、そんな些^{ささい}細なことは小事よ！」

「二重表現です」

「——口、ローゼ?! 説明はまだかしら?!」

「——ハアー。分かりました。でもその前に、胸から口を離してくれませんか? 慢^{が漫}しても気持ちいい——くすぐつたいので」

慣れ

配下になめられたままでは終われないニルソニア。

反撃の糸口を見つけ内心笑う。

「なーに? あなた、感じてるの?」

「いえ、決してそのようなことは

「そう、ならこれはどう?」

ペロリ

「ひやう!？」

「あら、可愛い声ね」

ジユルリ

「——つあん！」

「母乳は……出ないようね。でも血は出るでしょう」

カリツ

「——ツ!! 噛みましたね、噛みましたね!」

「なら、どうするのよ?」

クニクニ

「ど……つ、うするつて!」

コチヨコチヨコチヨコチヨ!

「あはははははは!!」

「こうするのです!!」

「やつ、たわね!」

ツーツ

「んツ——あ。そつ、ちだつて!」

サワサワ

「あははははは!」

ザラリ

「ひあ！」

コショコショ

「耳は、や、やめ」

ヨリツ

二

コ
チヨ
コ
チヨ

「あはははー!」

一一二

†

「年甲斐もなくはしゃいでしまつたわ」

あのあと、『滅茶苦茶セツ』「言わせませんよ!?」事実を歪曲しないでください!! に言いつけますよ! ·····違った。娘さまだ。とにかく、止めてください!!

『ショボーン（・ω・）』

上司

「キャラ崩壊しても、ダメなものはダメです！」

『そ、うか。ならば致し方ない。業務に戻る』

「ハア……すみません。あれが我らが父で。閑話休題とまいりましょう。」

†

†

†

「年甲斐もなくはしゃいでしまったわ」

あのあと、もうひと悶着あつたが、その時の騒動は機会があればまたいづれ。

今は、二人共にベットの端に腰かけて頭だけ向かい合っている状態だ。

ただし、ニルソニアはまだ三歳児の姿で、服は先ほど出来上がつたローゼお手製のワンピースだ。

ニルソニアが口を開いた。

「それでは、改めてローゼ。説明を頼めるかしら？」

紅い唇から吸血鬼特有の八重歯^{やえば}がのぞき、燭台^{しょくたい}の揺らぐ光を受け鈍く光る。

「どうして、私とあなたは服を着ていなかの？ どうして、私はローゼの部屋にいるのか。どうして、私は小さくなつたのか？」

主の命を受け、メイドは滔々と話し始める。

「**畏**まりました。それでは、説明させていただきます。まず第一に、何故お嬢さまが私の部屋にいるかですが、推測となります。ご了承ください」

「どういう事かしら」

ニルソニアが首をかしげる。

「それは……結論に関係ある事柄なので、その時になつたら説明します」

「そう……ならしいわ。続けて」

ローゼが頷き、話に戻つた。

「はい。ですが、その前に。失礼ですが、お嬢さま。昨日寝ている間の記憶はありますか？」夢でも何でも構いません

「変なことを聞くのね、ローゼ。えっと……ああ、夢を見たわ。内容は憶えていないけど多分悪夢だつたわ」

主の返答を聞き、ローゼは納得する素振りを見せた。

「なるほど。—そういうことでしたか。ありがとうございます、お嬢さま」

逆にニルソニアは困惑したようだ。

「どうしてそんなこと聞いたのかしら」「根拠の強化ですよ、お嬢さま」

メイドは続ける。

「お嬢さまが、何故私の部屋にいるかですが、おそらく、自らの足で歩いてきたと思われます」

「一番想像していなかつた『答』を伝えられたニルソニア。
動搖からか、的外れな反論を試みる。

「私、吸血鬼。翼^{はね}生えてるわよ。普段は畳んでいるけど。その翼^{はね}で飛んできたってことは無い?」

が、物的証拠があつた。

「いいえ、お嬢さま。それは、ありません」

「なんですよ」

「お嬢さまの足の裏に、廊下のカーテンにしか使われていない生地の糸くずが付いていました」

「それは……廊下を歩かないとい、付かないわね……歩いてここまで来た。それは分かつたわ。でも何で歩いてこの部屋まで来たの?」

コテン、と可愛らしく首を傾げた。

三歳児がすると恐ろしいほど破壊力抜群のしぐさを、先ほどと同じように内心悶えながら、

表情には出さず、

「憶測ですが、怖い夢を見たため人肌恋しくなったのでしよう。それこそ、飛んできた方が早いのに歩くといった非合理的判断を下すほどに」

と、ローゼは結論づけた。

「なるほどね……そんなにも怖い夢だつたのなら記憶がないことも納得できるわ。」

ニルソニアは、左手をパーに右手をグーにして、右手を左手に打ちつけた。所謂、ガ○テンド。、

「理解されたのなら良かつたです。次は、何故お嬢さまと私が素っ裸だつたのか、ですが、お嬢さまの場合は、お体が小さくなつたのでしよう。私の場合は、大方お嬢さまに脱がされたのでしよう」

これを聞き、ムツとするニルソニア。

「何で私があなたを剥かないといけないのよ」

と、毒づく。

「申しましたように、合理性、つまり理性が吹つ飛ぶほど人肌恋しかつたわけですから、体温がじかに伝わる真っ裸が一番良かつたのでしよう」

尤もなことを言われ、言葉に詰めるニルソニア。

だが、まだ疑問が残っていることを思い出した。

「理解したわ。残るはあと一つ。どうして小さくなつたのか」

「不明です」

「口一ゼ？ 私、耳が遠いみたい」

「三歳児なのにですか？」

「うるさいわね——もう一度言つてくれる？」

「不明です」

「……」

「ちなみに、お嬢さんを胸に近づけたら、勝手に吸い始めました」

「うそお？！」

「嘘です。口に入れてみたら、吸われました」

「それは、ほとんど同じことよ！？」

† † †

「少し取り乱したわ……」

ニルソニアは少し俯いている。

少し前の自分を思い出いて、これが人の上に立つ者のとる行動か、と今更ながら、本

当に今更ながら悔いていた。

「情けない姿を見せたわね、ローゼ」

それを聞き、慌ててフォローを入れようと、ローゼは口を開く。

「全くそんなことはありません——」

「そう……よかつたわ。あんなことはお父様お母様に対しても、したことなかつたから」

ニルソニアの顔が綻ぶ。だが、ローゼの台詞は続いていた。

「——しゃぶられているときの恍惚感ときたら。つまり私にとつてはご褒美です。
至福のひと時でした」

「えつ」

「えつ」

「えつ？」

再び、時が止まつた。

アインシュタインらは泣いていい。

9 心の奥底と記憶の彼方は似た者同士

再び、時が止まつた。

二ルソニア達も固まつた。

だが、彼女たちの思考は、止まつていなかつた。

「ローゼ。ねえ——ローゼ」

ネットトリと、問いかける。

同時に二ルソニアの笑顔も深まつた。

ただし、緋色の目は笑つていない。

「な、なんでございましょうかお嬢さま」

ローゼには、二ルソニアが何故こんな態度を採つてゐるか、心当たりがあつた。^と

雑談は途中で切り上げる。寝てゐる最中にいたずらしても、一切反応がない。

それぐらい、二ルソニアの心は閉じていた。

正確には、ある一定ラインより奥には踏み込ませなかつた。

それが、——100年もあつたのだ。いくつも見ていただろう——怖い夢を見た

程度で、ローゼのベットに潜り込んだ。そして馬鹿騒ぎにすら付き合つた。

——寝ぼけて、ローゼを『お母様』と思つた。

これらは、心を開いていた証拠だつた。

だというのに、ローゼは——

メイドの頬を冷や汗がダラダラと伝う^{つた}。

目が泳ぎそうになるが、どうにか耐える。

その光景が見えているのか、いないのか、

主は、トーンを落として言う。

「年甲斐もなくはしゃいでしまつたわ。情けない姿を見せたわね」

先程と同じ——まではいかなくとも、似ている科白^{セリフ}を放つ二ルソニア。

……失態を犯したローゼに、寛容^{かんよう}にも正解の、否、挽回のチャンスをくれるようだ。

ローゼは、ホツと一息吐いた後、主の質問に答える。

「いえ、全然。むしろ可愛かつたです。特に——」

「ホント？ 嫌じやなかつた？ 本音隠してない？」

二ルソニアが、ローゼの台詞^{セリフ}を遮つて、言葉^{さえぎ}を発する。

口を開いたことにより、いつそう八重歯^{ヤイバ}が鈍く光る。

鋭く冷たい視線が、ローゼを貫く。

どうやら、無かつたことには、してくれないらしい。

それどころか、掘り起こし暴こうとしているようだ。

だが、メイド兼奴隸のローゼにとつて、本気の主に逆らう事はしたくない事だつた。

(この二人の奴隸契約は少々特殊で、あまり強制力が無い。奴隸首環も付けていない)
「ええ、隠してるわけないじやないですか。とても至福のひと時でした。我々の業界で

はご褒美です」

逆らいたくはない、逆らいたくはないのだが、若干、誤魔化しにかかるローゼ。

だが、

「我々？ 他に誰かいるのかしら？」

「……私にはご褒美です」

「……まんざらじやなかつたのね、あの行為。私、血が出るぐらいには、あなたの乳房嚙
んだのだけど」

冷たい紺い目に、見抜かれてしまつた。

これで、ローゼは、3歳程度の幼女に欲情する人間の1人となつた。ローゼは、二ル
ソニア以外の3歳児には興味がないが。

ロリコン認定（ニルソニア限定）を受けたローゼ。
内心、焦っていた。

（どうしましよう。どうしましよう。ニルソニア様に嫌われてしまします。……いや、
それもご褒美なのでは？）

……案外余裕であつた。

1時の気の迷いであつてほしいが。

だが、一度外れた心のタガは、そう簡単には戻らない。

（もう、こうなつたら、いつその事、襲つてしまいましょうか。ベッドの上ですし）

ジユルリ。

ローゼが、いつの間にか、

肝が据わつた顔つきで舌舐めずりをしていた。

† † †

ゾワツ！

ローゼの心の中はわからなくても、身の危険を覚えたニルソニア。

今のローゼは、猛獸が黙つて逃げたすほど滾った目をしていた。

(これはしたくなかったけど、仕方ないわよね。この子が悪いんだから)

今から行わるのは、主が、おいたをした、またおいたをしそうになつた奴隸に対し
てする罰。せつかん そう折檻である。

だが、ローゼと二ルソニアは10年間共に育つた。

それ故に、二ルソニアは知つている。

通常の折檻では懲りるどころか、反撃すらしてくるだろう、と。

(どうしようかしら、何かいい案は……そういえば一度も試してない罰があつたわね)
なにかいい案を思いついたようだ。

† † †

「そういえば、10年間一度もこれは使つたことなかつたわね」

ニルソニアは、ベットから立ち上がりながらローゼに告げた。

「これ、とは?」

ローゼが尋ねるが、ニルソニアはすぐに答えず、両袖机まで進んだ。

そして、引き出しの右側三段目から、取り出したのは、

「これよ、これ」

奴隸の首輪だった。

サーツと、ローゼが青ざめる。

ローゼにとつて、

奴隸の首輪——奴隸環——とは、

忌まわしく悍ましい鱗剥おぞ
ひのきを象徴かくするものだ。

10年間心の奥底に潜んでいた禍虛ひごが呼び起され、

「お嬢様、それをどうするおつもりなので？」

ローゼの顔は、もはや能面に近かつた。

否、能面ではなくデスマスクに近かつた。

その反応にニルソニアは気づけない。気づかない。

「もちろん、あなたの首につけるのよ」

ニルソニアは、ローゼに首輪を付けたいらしい。いろんな意味で。

ただ、彼女のメイドが今、顔面蒼白になつていることを知つたら、すぐに取り止めに

しただろう。

ニルソニアは心の底から、つまり、本気で怒っているわけではない。
少しばかりお灸をすえたかつただけなのだ。

だつてそうだろう。

昨日、彼女の心を溶かしたのは、紛れもなくローゼだ。
そのローゼが心を凍えさすような真似をしたのだ。

文句の一つも言いたくなつてくるだろう。

——私の心はあなたにとつて、そんな軽々しいものなのか、と。
それでも、心を一回開いてしまつた以上、もう戻れない。
戻りたくはない。

忘れていた他人のぬくもりを、思い出してしまつたから。
溶けてしまつた心に、孤独は他人の悪意よりも堪たんえられないから。
だから首環をかける。

どこにも行かないように。
どこにも消えないように。

そんな己の奥底にある心の機微に気づくことなく、

(この首輪はどうやつて使う物だつたかしら。えゝと、思いだせないわ)

ニルソニアは呑氣にそんなことを考えていた。

ローゼを購入する時に、説明を受けたが、

聞き流していたせいで覚えていないニルソニア。

結局当の本人に聞くことにした。

「ねえ、ローゼ。これどうやつて使う物だつて、大丈夫?!」

ようやく、ローゼの惨状に気づいたが、時すでに遅し。

ローゼは、先ほどまで苦し気に胸を押さえていたのだが、今はベットの上で安らかに横になつっていた。その顔に血の気はなく、真つ青だつた。

「ローゼ?! ローゼッ!!」

体をゆする。胸が少しだけ揺れる。

「あ、う……」

吐息が漏れた。

ローゼはどうやら気絶しているらしい。本当に眠つているだけだつた。

胸を撫でおろすニルソニア。その手は引つかることなくスムーズに動いた。

ローゼは夢を見ていた。

今では見なくなつていた古い夢だつた。

遠??て?く?屋、

?暗?窓??い?屋、

夜通し聞?え??て?る少?の?えぎ声、

むせ??るほ?の?臭?、

森?中、薄暗い?道、主の?ない屋敷、

黒?棒?間、

避け?よられる、

当たら?い、

す?抜けられる、

打?飛ばせな?、

避け?される、

殴?れない。

ローゼは途中から夢が切り替わっていることに気づかない。
(ちょこまかと、よけるな。うつとうしい)

夢の中の棒人間に苛立ち、思わず手が出てしまう。

バキッ!!

人を殴った感触が手に残る。

(え？ 当たつた？ ……これがお嬢様を侮辱した――

「きやあ！」

罰で――――――す？ ？ きやあ？)

あの棒人間とは、似ても似つかない可愛らしい女性の悲鳴だつた。
耳に残る女性の悲鳴。

手に残る柔肌の感覚。

それが意味するところは……。

ローゼの脳裏にある一つの可能性が浮かんだ。

(もし、かして、ニルソニア様に当たつてしまい、ましたか？)

ローゼは怖がっている、目を開ける事を。だが謝らないと後が怖い。
迷つた末、そくつと薄目を開けることにしたローゼ。

開けた目に映るは、

崩れ落ちて頬を押さえる金髪の女性と、ニヤニヤ笑つている棒人間だつた。
心配していたことが杞憂に終わつて、ローゼ、一言。

「よかつた。本当によかつた。殴つた、拳が当たつたのが見知らぬ女性で！」
「じゃあその見知らぬ赤の他人に殴られても文句ないですよね！　私天使ですが！！」
拳が当たつていたのは、まさかのナレーショナードだった。

10 悪夢再び

前回までのあらすじ

ニルソニアが赤ちゃんプレイに目覚めかける



ローゼ、授乳プレイに目覚めかけたことが判明



ニルソニアからの首環プレイというか、首環攻め



ローゼ、トラウマにより気絶



夢を見ていると、棒人間出現



殴りかかる



何故か、ナレーショナーにあたる

イマココ図

「嘘は言つてません。ほんとの事も言つてませんが」

「よかつた。本当によかつた。殴つた、拳が当たつたのが見知らぬ女性で！」

「じゃあその見知らぬ赤の他人に殴られても文句ないですよね！ 私天使ですが!!」

ナレーショナー、床に崩れ落ちて女座り横座りしている。心なしか、翼しょが萎しおれてしまつてい
る。

棒人間、何を考えているか、外見からは全く予想できない。

専属メイド、まさかの主の声を聴き間違える痛恨のミスをやらかす。

「おいコラ。未来の私。見知らぬ天使ひとを殴つて謝罪しない方がミスでしょうが！ しかし
も、声のことが書いてあるのは前回でしょうに！」

いきなり、虚空に向かつて常人には理解できないことを喚き散らす天使。

その奇行を口一ゼと棒人間は白い目で見ていた。

「[削除済み]さん……失礼。間違えました。棒人間さんは理解出来るはずなんですが、話の本筋と関係ありませんが、ローゼさんが、無意識のうちに棒人間さんと同じ行動をとつていたと、知つたら心底嫌がるでしょうねえ」

「自分自身を無視するな！ そしていきなり隠れるな！ つて、え？ 一人とも私の事白い目で見ていたんですか？」

激昂していたが、いきなりキヨトンとした顔になるナレーショナー。そのまま、二の方を向く。

視線を向けられ、ローゼは様々な罪悪感からサツと目を背け、棒人間は様々な思惑から口を開いた。

「大天使サマの賢慮、貴意は、わたくし私ども愚人には到底、理解も及びませんが」

一旦、言葉を切る。

「さつさと本題入ろうぜ。こちとら結構待機させられてんだ。待つのも飽き飽きてんだよ。——なあ、天使サマよお。俺はいつたいいつまで待たなきやなんねえんだ？」

先ほどまでの慇懃無礼さはどこへやら、うつてかわって棒人間は、けだるげな口調で催促する。

忘れていたナレーショナーが慌てふためきながら答える。

「あ——ほ、本題に入りましょう。ローゼさんに殴られたことは水に流します」

「二人から、白い目で見られたことと、私にシカトされたこと。いろいろ忘れてますね、過去の私」

「うつさい。 そうでもしないと話が進まないでしょ。進めますよ」「あと脳内に直接話かけてくるな」

「ローゼさん、あなたに伝えるべきことがあります」

「ああ、なるほどですね。無理矢理にでも進めないと、この後の殺し合いがずっと続きますものね」

「え。殺しあうんですか？ それは止めないと。でもあれ？」

と、そこまで言つてローゼの姿がないことに気づく。

「あれ、あの～ローゼさんは何処に」「私ならここです——よ！」

ブンツ!!

棒人間の背後から音もなく忍び寄つていたローゼが、上げていた手を振り下ろした。

「おつと、危ねえ」

「ええい、避けるな！」

難なく避けられていた。だつて、体、細い棒だもの。頭大きいけど。
さすが、駄メイド。人の話よりも自分の欲望を優先したらしい。

いや、主を侮辱されたことへの怒りが理由だとすると、メイドの、従者の鑑かもしけないが。

†

†

†

「うーん、半、半つてどこですかねえ。ウザさに対する怒り50%、侮辱に対する怒り50%。

あ、そうそう、ちょっとこれ関係ないんですが、地の文を書いているとどうしても堅苦しい文章になつてしまふんですね。でも、堅苦しい方が第三人称神視点にはいいですよね。私天使ですが。（個人の意見です）

……いいんですよ！ 我らが父『上司』！ そんなテロップ入れなくても！ そんなこと言つたらこの文章のどこが堅苦しいのかつて——

ピン ポン パン ポーン

申し訳ございません。お見苦しい会話が続きます。

私の一存でカットさせて戴きました。

b y ヘカミユルナ

ピン ポン パン ポーン

「ふう、やつぱり、私が長々と語ると話が進まなくなりますね。どうしましようか。うーん——そうですね。」

【一旦現場にお返しします】

「この状況で返されても！　流れとか一切無視ですか！　ああ、もう！　やつてやりますよ！　ローゼさん！　振りかぶらないでください！　それじやあ当たるものも当たりません！　棒人間さん！　逃げないでください！　つてやつぱり逃げて！　ローゼさん！　そのバールのようなもの、どこから出したんですか？！　え？　置いてあつた？　メモと一緒に？　メモには『これを使え』と書いてあつた？」

「あつちやー、そつちに出たかー。あらすじの伏線回収しちゃつたか？」

「……なるほど。この忙しい時に、しかも私の方に出来しやがるんですか！　あの我らが父は！　ホーリー・ローラー、棒人間から肘打ちを鳩尾に、

ローゼから、バールのようなものを頭に、くらつてしまい、倒れふした。

『不幸な事故だつた』

【元凶が何言つてゐるんでしょうね】

「お二人とも、落ち着きましたか」

「ハイ、スミマセンデシタ」

二人はナレーショナーに正座させられていた。

あの後、ユラつと、フラつと、起き上がりつた聖母のような笑みを浮かべたナレーショナーが、天使の威厳を見せつけて、二人を非暴力的に鎮めた。

否、

ナレーショナーが、二人を、いや、残酷な描写は控えよう。

【自分の印象をおとしめたくないので記述しないようにしましょうね】

『ルビ振つといたぞ』

「

ピン ポン パ (r y)

†

†

†

†

†

†

†

「お二人とも、和解してください。ほら、太ももつねりあつたりしない」「なあ、天使サマよお。和解というなら俺たちも和解といこうじゃねえか」

棒人間は、ヘラヘラしながら言つた。

「どういう事ですか?」

ナレーショナーが聞き返すと、棒人間は肩をすくめ。

「おまえ、さつきゴタゴタの最中に『避けないでください』とか言つてなかつたか?」

「キノセイデスヨ?」

「気のせいか?」

「ハイ、キノセイデス」

ナレーショナーの眼が、だんだんそれでいつた。

それでいつた先には、体の横で手をスッと挙げているローゼがいた。

いい逃げ道が出来たとばかりに、ナレーショナーは嬉々として問い合わせる。

「何でしようか、ローゼさん」

「そもそも和解は無理です」

「えーと、何故でしょうか」

「理由は忘れました」

ズツコケそうになるナレーショナー。

「忘れたんですか？」

「はい、忘れました。ですが、とても腹立たしいことがあつたことは覚えていています——嘘です。全部覚えてています」

ナレーショナー、今度はこけた。起き上がりながら、「何の嘘ですか！」

と叫ぶ。

意図的か無意識か、そんな天使を無視しながら口一ゼは、

「そこの^{シャクトリムシ}尺取虫が我が主——ニルソニア様を侮辱のに謝罪していないことが理由です」

と、怒りをあらわにした。

「俺がしやすくとりむ「なら、和解はしなくていいので話だけでも聞いてください。謝罪はまた後日」——科白^{セリフ}かぶせんなよ！」

ムツとする棒人間。それには目もくれず、口一ゼ、

「それなら聞いてあげなくもな」

——ガアアアアアンンンツツ!!!

突如、空間が揺れた。

慌ててローゼと棒人間が立ち上がる。その際、互いの太ももをつねっていた手が離れる。

「なんですか?! ——ツ!」

ナレーショナーが手を耳に当てたのち、慌てた表情を作る。

「ヤバい!! マズいですよ!! 早くしないとローゼさん、帰れなくなります!!」

天使がローゼにとつて聞き捨てならない事を言う。

「帰れなくなるって、一体ここは何処なのですか? 夢、だとしても知らない場所が出てくる訳ありませんし」

喋っている途中から体が透け始めるローゼ。

「その疑問もまたの機会に! 棒人間さん、話を要約して伝えてください!」

その要望に応えた棒人間。

心なしか、逃げまくっていた頃よりも大きくなつた下腹部に片手を当てて、頬をポツと染めながら、

「もうすぐ産まれるみたい」

と、はにかんだ。よう見えた。表情が顔がないゆえ、確証はない。
それが、ローゼが最後に見た光景だった。

11 初めましてでしょーが

（ニルソニア視点）

まつたく。

ローゼが気絶するなんて誰も思わないじゃない。

そりやあ、十年間一緒にいた私の配下なんだから、トラウマぐらい把握しているのが普通なんでしょうけど、初めて会った頃のローゼは何をしてもほとんど反応がなかつたから、これほどとは知らなかつたのよ！

「ハーアー。落ち着きなさい、自分自身に腹を立てても仕方ないじゃない」

察してあげられたかもしれない、なんてすぎた可能性は考えるだけ無駄。

それより今は、私のベットで横になつているローゼに、看病といつたらおかしいけれどそれに近いことをしましようか。

といつても、どうすればいいのかしら？

私されたことはあつても、したことはないからよく分からぬのよね。

ううん、図書館に看病についての本、置いてあるかしら。

この屋敷の本つて吸血鬼ぐらいしか読まない内容の本が多いから。

うまく全身の血を絞り出す方法とか、血料理のアレンジ集とか。
ま、行つてみれば分かるわね。

† † †

まさかこんなに早く見つかるとは、ね。図書館にあるテーブルの上に置いてあるとは
驚きだわ。

……誰かが置いてくれた？ まさかね。……私以外、誰もいないわよね、。

不安になつてきたわ。ローゼのこともあるし、戻ろうかしら。

部屋でも本は読めるし。本当は図書館から本を持ち出してはいけない決まりなんだ
けどね。

うん、そうと決まれば、さつさと戻りましょ。

ドサツ！

あら、立ち上がりつた拍子に本を一冊、テーブルから落としてしまつたわ。

あれ、この本タイトルが書いてないわね。

ちよつと見てみようかしら。

ペラ。

「～～～～～～～～～～～～～ツツツ／＼」

ナニコレ！ 本当にこれ何？！

裸の女の人があいつぱいで、お、お、男の人と～～～／＼た、爛ただれているわ！ こ、これは私が責任をもつて処分するわ！ その時まで私が管理するわ！ よくって？！

† † †

「キヤラ崩れでますよ？ 頭真つ赤にして、早歩きで図書館から出ていくところを見ると、よほど恥ずかしかったんですね」

「そしてそのBOOKはどこに持つていくんですかね？」

「で、本二冊用意した我吾^上らが父司はないがしたかつたんですかね？」

『SEX!!』

「やめないか！！」

「あなたが喋ると太文字になるんです！ 太文字のS○Xとか書きたくないんですけど！」

†

†

†

さて、部屋に帰ってきたわ。

この本はサイドテーブルにおいて、こ、この本はベットの下にでも入れとけばいいかしら。

……ローゼ、うなされてるわね。汗もびっしょり。

これは、お風呂に入れた方がいいのかしら――……

「ハア」

まつたく、何のために図書館まで行つてきたのよ。分からぬことを調べるために
しようが。

えくと、本にはなんて書いてあるかしら。
なになに、

『首にネギを巻き、お、お、お尻の穴にネギを差し込む』
ですつて？

本当にこれで楽になるのかしら、人間は。

あ、これ『風邪をひいたときの対処法』だつたわ。

こつちが、『寝込んだ時の対処法』ね。

えーと、

『服を脱がし、タオル（ぬるま湯に浸けた後、硬く絞つたもの）で汗を拭き、清潔な服に

着替えさす

『着替えさしたなら、汗をかいて体内の水分が減少しているはずなので、飲み物を用意する』

『※注意：寝ていてるときに飲ませない。死にます』

……うーん。今、私小さくなっているのよね。具体的には九十cmぐらい。

体も感覚も違うから、体が思うように動かないのよね。そんな私にやれるかしら。ま、なるようにならぬいわね。

えーと、まずは、ぬるま湯とタオルね。

ぬるま湯は魔法で作つて、と。タオルは……脱衣所ね。

おつと、洗面器を忘れていたわ。

このままぬるま湯は、フヨフヨ宙に浮かせといて、タオルのついでに取つてしましょ。扉を開けて廊下に——さぶつ。冷えるわね。

靴下はいてからの方がよかつたかしら。

いえ、取りに行つても今のサイズが無いわね。ローゼに頼まないと。

その配下は気絶しているし。

——まつたく、もう。世話のかかるメイドだこと。

「ハアー」

冷たい廊下をペタペタ歩いていきましょうか！

「翼で飛べばいいのに、吸血鬼らしく。飛ばないとは、内心動搖しているんですね。わ
かります」

† † †

ううー寒つ。足の裏が痛いわよ、まったく。

で、洗面器とタオルを持ってきたから、次は服を脱がすわね。

おつと、その前にぬるま湯を洗面器に着水させなきや。よいしょ。

それじやあ、まずはベットの上に乗つて、のつて、の、つて。

……届かない！ こういう時、空が飛べたらいいのに——翼あるじやない！

「ハア」

何で気づかなかつたのかしら。

まあいいわ。思い出したなら、存分に使いましょ。さいわい、翼は小さくなつていな
いようだし。

よいしょつと。

——まだ、うなされてるわね、ローゼは。
今拭いてやるわね。

あれ、どうやつてこの服脱がすのかしら。
この子、時々変なとこにこだわるから、この子以外には理解できることがあつたり
するのよね。

私しかこの家いなわけです。

ほんとにどうやつて脱がすのかしら。

——この。——この！

無理ね。こうなつたら力づくりで！——やあ！

これでも、彼女は吸血鬼。

その腕力で衣装を力一杯引っ張つたなら

ビリビリ！ バツツ！ ブチンツ！

当然、破ける。

——あ、やつちやつたわ。ま、まあ？ あとで作り直してもらいましょ。そろそろ衣
替えの季節だしね。

——うーわ。私の哺乳んだ後、乳房にまだ残つてる。あれが気持ち良かつたの？
何で私これとお母様を間違えたのかしら。全然似てないわ。

ま、うなされてるし、さつさと終わらせましょ。

† † †

まつたく、なんで私が給仕の真似事までしなくちゃならないのかしら。

そういうのは、『ア〇チャ一の仕事でしょ』

「赤い悪魔はさつさと聖〇戦争にお帰りください」

そういうのは、ローゼの仕事じゃない。

おかげで、まいごになつたわよ。傑作ね。三歳児が自宅で迷子。

この屋敷、二人で住むには広すぎるわ。

掃除できていない部屋もあつたし、メイド増やそうかしら。

いえ、文句も、愚痴も、相談も、ローゼが起きてからね。覚悟しどきなさいよ！

——つと！ おつとつと！ 危ないこける！

「——ふう」

危なかつたわ。何もないところでこけるなんて。

この体じや、激しい運動は出来ないわね。

両手で紅茶が載つてゐるトレーを持つてゐることも原因だと思うけどね。

さて、バランス感覚もつかめできたし、進みま——
——ガアアアアアンンンツ!!!

突如、空間が揺れた。

歩き出すために、一歩を踏み出そうとしていたニルソニアは、顔面からこけた。それはもう、盛大に。

バラエティーなら、3カメ分の映像は流れていだろう。それほど見事なこけつぶりだつた。

なお、ティーセットは頭の上に掲げ、死守していた。

いつたあーつ！　何よ今い！　ローゼは大丈夫かしら？！　地震じやないし、魔法攻撃？　いえ、今のは何かが割れるような音に近かつた。だつたら——ゆかちべた！

寝つ転がつてないで、立ち上がりましょ！　寒い！

むう。三歳児の体の体からか、うまく立てないわ。

ティーセットを置いて、ゆつくりと立ち上がりましょ。
ほら、ゆつくり、ゆつくり、

「キヤアアアアアアアアアアアアアアア——ツ!!」

ゆつくりしてられないわ！ 飛ぶわよ！ 翼を広げて離陸！

私の部屋までは、たしかこのまま一直線！

見えた！ 扉ジヤマツ！ ええい、

「館の主が命ず。《開きなさい》！」

よし！ 開いた！

飛び込んで着地！

「ローゼ!! 大丈 夫……？」

私疲れているのかしら。うん、疲れているのよ。

慣れないことを、慣れていない体でしたから、疲れているのよ。

ああ、だから、

ローゼが二人に見えるのよ。

† † †

ローゼは棒人間から『もうすぐ産まれそう』などとほざかれながら、目覚めた。

これで悪夢は終わつたはずだつた。

しかし、まだ悪夢は終わつてなどいなかつた。

恵夢

ここからがローゼにとつて地獄の始まりだつた。

なぜなら、
ころし

白くきめ細かい柔肌、
ころしたくてうらめ

深い海を思わせる蒼い虹彩、
ころしたくてうらめ

所々はねでいる艶やかなくせ毛、
ころしたくてうらめしくて

緩やかな曲線を描き、腰まで伸びた銀髪、
ころしたくてうらめしくてきらいな人間

人並み より少しだけ小ぶりな胸のふくらみ、
ころしたくてうらめしくてきらいな人間

力モジ力を想起させるすらりと引き締まつた肢體、
ころしたくてうらめしくてきらいな人間がいた

シャープな印象をあたえ、それでいて丸みを帯びた女らしい顔の輪郭、
りんかく

ect : ect :

ローゼと瓜二つの全裸の美少女が、否、ローゼ自身が目の前にいた。

ただ、ニヒルにゆがんだ唇だけがその顔に似合わなかつた。

そんな奴がベットで寝ていたローゼを覆いかぶさるようにして存在していた。

す

† † †

「混乱しないように、ローゼさんをローゼ壱、覆いかぶさっている方をローゼ弐としま

†

†

ローゼ弐がゆがんでいる唇を開ける。そこから飛び出してきたのは、

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア——ツ!!」

甲高い悲鳴だつた。

尤も、悲鳴を上げたいことになつてゐるのはローゼ壱だが。よく分からぬが、このままではされるがままだ、と思い、

取り敢えずローゼ弐の下から抜け出そうとするローゼ壱。

だが、ローゼ弐に力を絶妙にそらされ、ローゼ壱弐共々、半回転。

ローゼ壱がローゼ弐を押し倒したような格好になつた。

その時、部屋の扉が開いて、文字通りニルソニアが飛び込んできた。

「ローゼ!! 大丈 夫…………?」

と、言つたきり、自身の目頭をほぐすニルソニア。

† † † †

「え? 『余計に分かりにくくなつた』ですか? うん、どうしましよう。……じゃ、ローゼ壱、即ちローゼさんはローゼ、ローゼ弐、即ちどごぞの馬の骨は存在X、とでも呼びましょか。ローゼがゲシユタルト崩壊寸前ですね」

† † †

未だ、現実を受け止められていないニルソニアに向かつて、ローゼと存在Xは異口同音に

「私が本物のローゼです! 信じてくださいお嬢さま!」

と、叫んだ。

ローゼは内心焦りながら、存在Xは内心面白がりながら。

どちらも思う事は同じ、即ち、ニルソニアは見分けることはできるのか。

ニルソニアはそれを受け、ようやく目の前の光景が現実だと分かり、分かり、

「今度は幻聴? 誕生日に慣れないことはするもんじやないわね……誕生日、昨日だつ

たあ……」

† †

「分かつてなかつた！ 全然分かつてなかつた！ これにはさすがの私も苦笑い！」

『貴様のことはどうでもいい。話を進めろ』

「ハーア。ううんと、少しばかり書き方変えますね」

† † †

「本当のローゼはこの私です！」

と、ここまで意図せず……たぶん意図せず二人とも同じ台詞を発した。

だが、続く言葉が分かれた。

ローゼは「ニルソニア様！」と。

存在Xは「御主人様！」と。

ニルソニアの眉間にほぐしていた手が止まつた。

顔を上げ、二人のローゼが重なり合っているベットに近づく。
その足が踏みしめるは地から宙ちゆうへと移り変わりゆく。

吸血鬼が翼をはためかせ、空くうを歩いてくる。

二人の前までくると、上に乗つていたローゼを足で転がし。

「ニルソニア様?!」

下に挟まっていた存在Xを引きずり上げ。

「御主人様！」

にこやかに笑いかけた。

その笑みはローゼにとつて見覚えのあるもので、つい先日自分に向けられたものだつた。

ローゼは複雑に絡まつた感情をため息として吐き出した。

ニルソニアは引きずり上げた存在Xをベットの上に立たせ、自身はそのまま一步、二歩と後ろに進み、ベットの外に立つた。
「さて、何か言うことがあるんじやないかしら」

ニルソニアは腕組みをして、上にズレる。

「信じてくれてありがとうございます！ 御主人様！」

ニルソニアを見上げる存在Xの目はうるんでいた。
だが、

「違うでしょ」

「え？」

翼を大きく一打ち。急降下。

「初めましてでしょーが

存在Xの土手つ腹にドロツプキックが炸裂した。

「発言を撤回するわ。全然お母様に似てないって言つたけれど、あのローゼ、いいえ、前から後ろに髪を払い、ニルソニアが一言。

「発言を撤回するわ。全然お母様に似てないって言つたけれど、あのローゼ、いいえ、ローゼの形を借りたナニカに比べたら、まだ似てるわ」

12 「では、ニアたん」

「で、あなたはどこの誰なのかしら？」

存在Xは亀甲縛りにされ、そのうえで椅子に縛り付けられていた。
服装はメイド服。

秋も深まり、肌寒くなってきた今日この頃。

裸ではかわいそう、ではなく、見てるこつちが寒いという理由で、ニルソニアがローゼと存在Xに着させたのだ。

持ち主はローゼ。勿論、サイズは二人共にピッタリだ。

「さあ、誰だと思う？ 当ててみな」

先ほどまでしていたローゼの真似はやめたのか、憎たらしく口角を吊り上げながら嘯うそぶく存在X。

ニヒルにゆがんだその笑みは、やはりローゼの顔には似合わない。

「考える必要はありません。お嬢様」

その肉体の本来の持ち主、ローゼが口を挟んだ。
だが、

「ちよつと待ちなさい……あなた、さつきまでさりげなくお嬢さまじやなくてニルソニ

ア様つて呼んでたわよね」

ニルソニアは淡々と呟いた。

その顔は前髪が影を落として見えず、何を考えているのか分からない。

その上、秋だというのに、ニルソニアの頭の上には陽炎かげろうが立っていた。

「様ではなく、chanが良かつたですか？」

ローゼは真顔で尋ねた。

流石、駄メイド。ブれない。媚びない。怖いもの知らず（首環は除く）。

実際は誤魔化しにかかっているだけなのだが。

「誤魔化せてないんですけどね」

ニルソニアがボソボソ喋る。

「聞こえません」

でいいわよ

「え？ なんですか？」

「だ、か、ら！ ニアでいいわよって、何度も言わせないで！」

……ニルソニアが下を向いていたのは照れ隠しであつた。

ここで、蚊帳の外であつた存在Xが『chan chan』を入れてきた。』

「久しぶりに出ましたね 我らが父^{上司} 茶々を入れたのはあなたでしよう？」

「ところで、我らが父。いたずらが過ぎると、娘様より苦情をきてます」

「なので、川で頭を冷やしてきて下さい」

『分かつたから、そのロープから手を離そう』

† † †

ここで、蚊帳の外であつた存在Xが茶々を入れてきた。

「俺も二ヤつて呼んでもいいかい？」

「あなたはダメ——二ヤじやなくてニア！ 漢数字にしないで！」

「そうかい。そりやあ、残ne——ツイ?!」

存在Xは肩をすくめようとした。

が、縛られているままだったので、繩が食い込むだけに終わつた。

結構痛かつたらしい。

「ふん」

ニルソニアは髪を払い、ローゼに視線を向ける。

「それで？ 私が考える必要がないって、アレが何か知っていると？」

「はい、ニアちゃん」

「……」ローゼ。ちゃんはやめて

ニアちゃんは頭を振った！ しかし効果はいま一つだ！

ローゼの攻撃！

「では、ニアたん」

ローゼの『真顔いじり』！ 効果は抜群だ！

ニアたんの怒りが1上がった！ 防御が1下がった！ 恥ずかしさが10上がった

！

ニアたんの攻撃！

ニアたんの『顔を赤らめる』！ 急所に当たつた！ 効果は一部分に抜群だ！

しかし、尊さで浄化され動けない！

ニアたんの攻撃！

「——ニア様にしてくれるかしら……」

ニア様の『照れながらの上目遣い』！ 効果は抜群だ！

ローゼは今だけ倒れただ！

ニルソニアは『ニアたん』『ニア様』の称号を得た！

「……いつたい、俺は何を見せられているんだ？」

存在Xは蚊帳の外側に押し出されていた。

† † †

「ナニツトモンスターですかねえ」

『ポケットモンスター』

「ちょっと黙つて下さい」

† † †

「では、ニア様」

「ええ、それがいいわ。それ以外だと反応しないから」

「……」

ローゼが悪い顔をしていた。それも一瞬だけのこと、真顔に戻ったローゼは存在Xに

近づく。

存在Xの前で、ズイツと前かがみになり

「棒人間さん。元気に子供は生まれましたか？」

「おう、この通り大きくて元気な女の子だ」

「……」

「……」

「……」

「は！　しまつた！　自分が棒人間だと認めてしまつた！　予定では

『？　俺たちは初対面なはずだが？』

『おや？　あなたは頭の出来も悪いので？——失礼、これでは自分の悪口になつてしま

いします。こう言い換えましょう。——あなたは頭の使い方も分からぬので？』

『なにぶん、こんな低スペックは初めて使うもんでな。勝手がわかりにくいいんだ』

ここまで読んで考えていたのに！　おのれ策士め！　でも、言つてしまつたことは仕
方がないな、うん。そうだ、俺が棒人間だ

あつさり棒人間だと認める存在X。

夢の中では、バールのようなもので背後から不意打ち^ガ^{ンツ!}しようとしていた割に、ローゼ

が本人？を前にして起こつていなかつた。

「それで、悪夢に出てきた棒人間^{クソつまようじ}が私の姿で何の用です？」

と、思つていたら、冷静どころか怒つてた。本音と建前、逆になつていた。

だが、棒人間には気にした様子はない。

「もう、爪楊枝みたいな体じゃないから取り合わないぞ。——用があるのはお前じやねえ。そこの吸血鬼だ」

「私？」

ニルソニアが自信を指さす。

「そう、テメエ。——ああ、そうだ、この方がしつくりくる」

彼の纏う雰囲気が変わる。

いや、残っていたベールがはぎ取られたというべきか。

いつの間にか、ニヒルで不敵な笑みが似合うようになつていた。

「俺がテメエに望むものは二つ。一つは俺に名をつける事。二つはここで俺を雇うことだ」

ローゼと同じ声帯を使用しているため声も同じなはずなのだが、別人のようなハスキー・ボイスと化していた存在X。

嘲笑にも似た笑みを浮かべ、眼を爛々と輝かせていた。
らんらん

「……名前は別にして、私たちにはあなたを雇うメリットがないわ」

ニルソニアがどうでもよさげに頭を横に振る。

確かに、彼を雇つてもニルソニアたちにメリットはない。

屋敷の掃除も、洗濯も、料理も、全てローゼが一人で行っている。

彼を雇えば、ローゼの負担を減らせるかもしれないが、半端な人間なら逆効果だろう。そもそも得体の知れない、それこそ人間ではなく幽霊かもしれないような奴を家に置くのは、吸血鬼としても貴族としても願い下げだ。

ニルソニアが使用人を増やそうかと考えていても、だ。

だが、彼が指摘してきた点は、そこではなかつた。

「確かにメリットはねえな。ただし、テメエらのデメリットは潰せるけどな」

視線をローゼに移し、存在Xは続けた。口を歪ませたまま。

「今、俺はそこの使用人の体と同じの体だ。すなわち、俺が事件でも起こそうもんなら、ローゼ、テメエが捕まるつてわけだ。だつたら手元に置いて監視した方がいいんじやねえのか？　どこの馬の骨とも知らない相手に自分のふりされて、面倒ごとを引き起こされるのは、想像するだけで嫌なんじやねえのか？」

いつの間にほどいたのか、存在Xの体を荒縄が滑り落ちていった。彼は白く美しい脚と手を組み、ポーズを決める。ただ、腕と脚に荒縄の跡が残り、締まらないが。縄なのに締まらない。

† † †

「あー。手足に跡が残るということは、特殊な亀甲縛りですね。これほどくの、他人の

手を借りないと無理だと思いますが。……何のためにローゼさんがこれを知つていたのか、深くは追及はしませんよ?」

† † †

確かに棒人間が語るデメリットは厄介だつた。
それが意味するところは、身に覚えのない罪によつて投獄も、最悪死刑もあり得る、ということだ。

配下が罪に問われれば、主人の名も墮ちる事となる。
だが、ニルソニアの態度は変わらない。

「あなたをここで殺してしまえば、何も問題はない。そうは思わないかしら」
ニルソニアの眼がすわり、人の上に立つ捕食者ヴァンパイアのそれとなる。

が、やはり存在Xはどこ吹く風。

「それはない。テメエは俺を殺さねえ」

そう断言した。

自信ありげに断言されたら、理由を聞きたくなるのが人の性さが。

「何故言い切れるのですか?」

ローゼが尋ねると、棒人間——存在Xは、

「それは俺が天使だからだ」

「勝手に天使を名乗らないでほしいです」

『同感だ、ナレーショナーよ』

「あ、生きてたんですね。川に沈めてられていたのに」「嘘ですね。天使というのは私が殴つてしまつたナレーショナーという女性の方ですよね。つまりあなたじやない。ニルソ——ニアた——ゴホン。ニアさま、食べていいです

よ

「——チツ。
はあ。——わーい。デザートだー」

「ひやああ!? た、食べないでください!!」

「食べないよ！ 吸うんだよ！」

「もう一度沈めましょか。今度は重りを詰めて」

『赤ずきんちゃんのオオカミ的エンド!? あちらはサーバルエンド?!』

「——二人とも、キヤラ、ブレてませんか?」

† † †

「ピーンポーンパーンポーン」

『ま、待て娘よくら神とはいえ口はそんなに聞かなああ————』
「少々お待ちください」

† † †

「さて、ネタはこれぐらいにして、本当の理由を話すから首から離れてくれねえか。貧血で喋れなくなる前におわらせてえんだけどな」

存在Xの顔色は悪い。今にも倒れそうながらに。

「あなたの血も、ローゼと同じ味がするのね。気に入つたわ。話ぐらいは聞いてあげる」対してニルソニアはお肌つやつやだつた。

満足したのか、首元から離れていく。

「その前に、名前つけてくれねえか？　あのーなんだ、そのーほら、呼びにくいだろ？」

「あなた、名前無いの？」

「——ちよつと、忘れちまつてな」

存在Xはさりげなくごまかした。

「——そう。ローゼ、こいつはあなたの悪夢に出てきたのよね」

ニルソニアは何か察したようだつた。

「その通りです。ニアた——ニア様」

ローゼの答を聞き、ニルソニアは満面の笑み。

「さつきは仕方なく許したけど、次間違えたら吸つてる最中に戻すわよ。——あなたの名前は、悪夢から出てきたからナイトメアから取つてメアでいいじやないかしら。さ

あ、名前つけたわよ

※血管に空気を入れると死にます。ローゼだとしても……多分死にます。多分。

「ああ、分かった。それでいい。ありがとな」

「さて、説明だ。実は天使というのはあながち間違いじゃねえんだ。神サマがローゼ、テメエの恩返しに協力しろって、送り出したのが俺なんだよ」

† † †

「嘘は一言も言つてませんね。あのあと、何だかんだでメアさんはこの屋敷で雇われることになりました。べ、べつに、テンポが悪いからカツトになつたわけじゃないんだからね！」

† † †

「そういう事なら他にも方法があつたでしょに」

床に落ちたままだつた荒縄を回収するためにローゼは存在X——メアの後ろ側に回つた。

自然な動作で口をメアの耳に近づけ囁く。
ささやく

「侮辱した件、許したわけではありませんから」

メアは何も言わず肩をすくめた。

その動作に思わずイラつとしたローゼ。危うく殴り掛かりそうになるが、寸前のどこ

ろで堪える。

一応、同僚になる人間? なのだから直接的な攻撃はやめようと、ローゼが、キツチンにバナナを取りに行こうとしていると、

「なんでバナナ? バナナでどう間接的に攻撃するつもりなのでしょうか?」
 ローゼが、キツチンにバナナを取りに行こうとしていると、
 ――ガアアアアアンンンッ!!!

突如、空間が揺れた。

「あ? おい、またかよ!」メアが吐き捨てる。

「ほんと、なんなんでしょうね」ローゼが疑問に思う。

「――あ、」
 ニルソニアが言葉を漏らす。

「これ、結界が破壊されるときの音だ……」

12.3 「[『もう遅い』]」

「目標、第二防衛ラインを突破！ 急速に接近中！」

「第二第三防護壁展開！ ならびに、ルート542からルート613までを閉鎖！」

多くの機材が並ぶ薄暗い部屋に怒号が飛び交う。

所々で光源が点滅しているそこは、ナレーショナーの自室。

ではなく、記録室の地下深くにある空理演算メインコンソール室。

「第二防護壁崩壊！ 使用可能な防護壁、残り35枚！」

そこが今、襲撃を受けていた。

「仕方ない」

「第一トラップ《ピット・フォールバースト》、
極寒の天から灼熱の地に沈め

および第二トラップ《貫かれ、破裂せよ》を起動！」

「了解しました」

「対侵入者迎撃用火水風地複合術式《ピット・フォールバースト》、
極寒の天から灼熱の地に沈め

電水複合術式《貫かれ、破裂せよ》を発動します」

「第三防護壁が予定どおり突破されました！」

「目標、ポイントへと向かっています！」

慌ただしく報告と指令が飛び交う。その中にナレーシヨナーの姿があつた。

「ふう、しばらく様子見ですね。あ、皆さん前回ぶりです。いつもニコニコ、皆さまのそばに這い寄る天使、ナレーシヨナーでございます。まさか、自身がたくさんパロディしててのに自分がされたら怒るなんてことはないですよね。さてさて、今回は前回何だかんだで描けなかつた、『何だかんだで雇われることになった』の部分をご紹介しようと思います。あ、現在襲撃しゆうげきにあつてますが、ご心配なく。ジャンルが変わつたとかではないので。それでは、本文をどうぞ」

† † † † † 前回のあらすじ

存在Xが亀甲縛られる→ホ○ケモンバトルが始まる→存在Xは棒人間だつた（過去形）→棒人間（過去形）態度が豹変する→メアつて名前をもらう→何だかんだあつた→あれあれ？ 結界壊れてない？

今？ 襲撃？ 前回関係ない、今のところは。

†
†
†
†
この先の文章は前回、メアの「ああ、分かつた。俺なんだよ」という台詞からの続

きです。

『どこだよ』

「カツトしたって私が言つているところです」

『分かりにくい』

「後で変えときまーす」

† † †

常人ならいろんな意味で衝撃を受けるだろうメアの告白だが、ニルソニアは動じなかつた。

それどころか、鼻で笑い飛ばした。

「神？　は、今更神だなんて信じられる訳がないじゃない」

ニルソニアの眼が鋭い光を帯びる。

「本当に神がいて、善意でローゼのやろうとしていることを手伝うつもりなら。だつたら、どうして、私の両親は帰つてこないの？　百年以上祈り続けたっていうのに？　どうして？」

自身の過去を吐き捨てるようにメアにぶつける。

それは今までローゼにさえ、10年間隠し続けてきた心にある影だ。

少しばかり感情が高ぶつているとはいって、ニルソニアがそんなことを躊躇なく話してくれるようになったことを、ローゼは場違いながら嬉しく思う。

日記を見られる前のニルソニアなら、こんな奇妙な侵入者が現れた時点で事情聴取もせずに、即刻地下牢にぶち込んで警吏に突き出していただろう。

ただ、ローゼはこうも思う。

——何故、こいつに話してしまうのか、と。

その思いが振る舞いに漏れ出てしまった。

キツとメアをにらみつけてしまう。

そんな重い感情たちをぶつけられても、メアは表情を崩さない。それどころか、ニヤついた笑みをヘラヘラしたものに変え、

「いや、そんなことを言われても困るよな、ヘカミユルナさま？」

と、いつの間にかメアの隣にいた女性に話しかけた。

冥界と月を司る女神であり、神々の良心とも呼ばれる（メアが勝手に呼んでいる）最高神の娘ヘカミユルナその柱ひとであつた。

「神々にだつて限界が存在するのです。全員が全知全能ではないのです。尤も、一柱全ひと力を出せば、世界を崩壊させかねない馬ば——失礼、神がいらっしゃいますが」
鈴を転がしたかのような心地よい可憐な声をしていた。

メアが頭をかきながら、面倒くさそうに、しかしども楽しそうに。

「あー、紹介するわ。この柱は冥界と月の神、ヘカルナ様。あだ名はヘカルナちゃんか、ヘルナちゃん。今付けた。最高神の娘であり、俺をここに送り込んだ張本人の一人であり——」

「第一および第二トラップ突破されました！」

† †

「うわ、ここでですか。タイミングがいいのか悪いのか。——第一トラップは地の底まで続く落とし穴に、大気圏最上層から強制的に起こしたダウンバーストで突き落とし、落とし穴の底に溜まっているマグマとダウンバーストに含まれる大量の水分で水蒸気爆発を起こし追撃する術式ですが、本当に突破されました？」

部下はコンソールを確認することで精いっぱいらしく、声だけを放つた。
「まず、落ちませんでした！」

衝撃の答え。

「……ダウンバーストは風速70mにもなるはずですが。——第二トラップは全方位ゼロ距離からの水槍でめつた刺しの後、電子レンジ（一瞬で水が蒸発する威力。運が悪ければ、プラズマ化する事も）でチンするのですが、これは避けられませんよね」「はい！ 死んだあと生き返ってました！」

これを聞き、ナレーショナーは天を仰ぐ。仰いだところでいるのは、あの筋肉だが。

「……知つてはいましたが、絶望的な能力ですね」

数秒間、天井を見つめていたが、視線を前に戻すと。

「まあ、いいでしよう。こちらの狙いは時間稼ぎです。——第三トラップ『EACTA MRG』、第四トラップ『EACTAM』の設置場所はこの部屋に続く最後の直線通路、通称『もつとも修理費用のかかる例のアレ』だ！ そして、『EACTAM』の起動に伴い、直線上にある全隔壁を特殊展開！ 時間を稼げ！」

「了解しました。対侵入者殲滅用特殊戦略級兵器『EACTAMRG』および『EACTAMRG』専用加電隔壁、ならびに虚時空融合術式『EACTAM』を制限起動します」

† † †

「あー、紹介するわ。この柱は冥界と月の神、ヘカミユルナ様。あだ名はヘカルナちゃんか、ヘルナちゃん。今付けた。最高神の娘であり、俺をここに送り込んだ張本人のひとりであり——」

「——実は滅茶苦茶パットで盛ってる貧乳だ」
例のことく、時間停止が起きた。

ヘカミユルナは何が起きたかさっぱり分からないと言わんばかりに、目を白黒させていた。

が、気にすることなく、いや、一層イキイキしながら話を進めるのがメアクオリティ。「この事はこの場の四人しか知らねえ。——いや？ 一応のため、天使がこの場を監視してるんだつけか？ だつたら、今のやつはお父さまの所まで報告がいくんじやねえ——」

「あー！ あー！ あー！」

メアの言葉で再起動した貧乳女神さまは、全力で両手をぶん回し事実を揉み消そうとする。

手の動きに連動して動くその胸は、なるほど不自然な動き方をしていた。

だが、

「[『もう遅い』]」

報告はすでに終わっており、必死の努力（女神としての威厳が死んだ）も、無駄に終わった。

結局、全員に知られてしまつたヘカミユルナさまなのであつた。

12・8 「あ！ 私のパツド！」

「う、うう、こんな奴のフォローになんて来るんじやなかつたよお」最初にあつた神のカリスマはどこに行つたのか、パツトがバレたヘカミュルナはイジイジしている。

「ふええ、おうちがえりましゅ……」

泣き言が口から漏れ始めている。しかも、若干幼児退行も入つている。

が、やはりここは神々の良心と呼ばれることはあるへカミュルナさま。「よし、さつさと終わらせて、さつきのメアさんの発言の部分だけ切り取つてもらいましょうか」

気を取り直し、サクッと復活した。このぐらいの辱めはいつも受けているのだ。

そのうえ、転んでもただでは起きない。パツトであることを真実を隠そうとしていた。

ふと、空気が変わる。

ヘカミュルナが纏い直したカリスマは、なるほど、無神論のニルソニアとローゼに神だと、信じさせる威厳を持つていた。

「では、あらためて自己紹介を。私はヘカミュルナ。冥界と月を司る女神です。」

一拍。

「実は、ニルソニアさん、あなたの祈りは月と夜の化身たる私のもとに届いていました」「だつたらなんで……なんで!!」

ヘカミユルナの独白を聞き、ニルソニアは溜まっていたのか、怒りが噴き出した。

「……先ほども申したように私の管轄は月と冥界です。すなわち『夜』と『死者』。この二つしか私には扱うことが出来ないんです」

今まで黙っていたローゼが口を開く。

「……つまり、どういうことですか？」

「私は夜の間に起きたことや、死者のことなら何でも知っているという事です」

「——私の両親は吸血鬼で在りながら夜に活動、または外出せず、死んでもいいと？」

ヘカミユルナは首を縦に振った。

「その可能性が高いです。——ああ、そんな悲嘆な顔をしないでください。あなたが考えているようなことにはなつていませんから。死ねずにエネルギー源になつているとか、灰になつたままでいるとか、そんな生きているようで死んでいる状態も管轄内ですかから」

少し息を整える。

「そのために、このメアさんを送り込んだんですから。私の口から言うのもなんですが、

ローゼさんの恩返しはニルソニアさんのご両親を見つけることでしたね。——夜にひとりごとや、祈つたりする行為は全て私の所に届きますからね」

ローゼが穎然としない顔で頷く。

「ええ、その通りです。——なんでこのタイミングであなたが言うのですか？　何故ですか？　《私の口か伝えたかつたのですが。》——私からご主人様にドラマチックに伝えたかつたのになぜあなたが言つてしまふのですか？　《残念です。》……覚えておいてください。しかし私は祈つたりひとりごとで漏らした覚えがないのですか？」

「……タレコミがありました。悪質なタレコミが。とにかく、メアさんは、応えきれなかつたニルソニアさんの祈りへの罪滅ぼしの為に送り込んだんですよ。それはつまり、ローゼさんの計画を手伝うことに他ならない。彼は私とのリンクを持つています。なので、このように私が下界に降臨することも、容易に可能としているんです。だから」「それ以上はもういいわ」

ニルソニアがヘカミユルナの言葉を遮つた。

「つまり、こいつを、メアを雇つた方が私たちにメリットがあるって話でしょ」
何かを逡巡したあと、

「……いいわ。あなたの罪滅ぼしを受け入れてあげる」

ニルソニアは、視線を合わせず、ぶつきらぼうに告げた。

不意にヘカミュルナの目頭が熱くなる。

ニルソニアが告げた言葉は、百年間心を痛め続けていた彼女にとつて、大きなものだつた。

「——ありがとうございます」

だからこそ、その感謝の言葉は自然と口からもれた。

ニルソニアが照れくさそうにそっぽを向く。

「やめてよね。許したわけじゃないんだから」

「——ええ。それでも、です」

今だけは、メアも空氣を読んでいた。

† † †

「でも、本文に百年間悩んでいた描写がないため、メアさんが静かにしていてもあまり効果がないんですけどね。テンポのための犠牲ですよ」

『いろいろ台無しだ』

「あ、石はおいしかったですか？」

『ガイアの味がした』

「——その神、私たちの世界にはいませんからね？」

† † †

「では、皆さん、最後に手を出してください。私からの祝福です」

三人が手をヘカミユルナの前にかざすと、脳裏にこんな文言が浮かんだ。

【《月と冥界の祝福》と《死神の呪い》を得ました。】

「え？ 死神の呪い？」

ローゼとニルソニアが首を傾げた。

「それは、誰かに私の秘密^胸のことを伝えたりしようとすると、発動する呪いです。気を付けて下さい」

その時のヘカミユルナの表情は、メアのそれと似ていた。

と、笑みを浮かべると同時に、転移魔法を発動させる。

「それでは皆さん、あまり早く私のもとに来ないことを祈っています」

と、徐々に消えゆく姿。

そのまま姿が見えなくなつた。

——とか、そんな最期を許すメアは存在しない。

不意に声が響く。

「これなーんだ」

全員の視線が集まる中、メアは二つの肌色を掲げた。

「あ！ 私のパット！」

そう、ヘカミユルナ特注三カツUPパットである。

当然、胸元からそんな大きい物体を取り出された着物は、はだけている。

「いつの間に！ か、返して——————」

シュンツ

直後、転移が完了した。

パットをメアの手に残したまま。

†
†
†

「ふーう。何とか最後まで行けましたね。時間稼ぎは成功と言つていいで——」
ガキンツ

と、硬い何かを打ちつけるような音が響く。

「——状況は?」

ナレーショナーの方を向いた部下は青ざめていたが、目的は達成したため笑っていた。引きつっていたが。

「今メインコンソールルームの前です」

ナレーショナーが首をかしげた。その間にも音は鳴り続いている。

「え、え? 時間稼ぎの為の装備とはいえ、いくらなんでも早すぎませんか? 『EAC TAM』はどうしたんですか?」

口調が司令めいたものから元に戻っていた。

と、突然室内の明かりが消える。

この世界の明かりは魔法か魔術かで光っているが、この部屋だけは電気によつて光つてているのだ。

この部屋、しいては、この地下施設のすべては最高神が転生者であるメアの記憶を覗いて創つたものだ。

最高神曰く『地下施設なんて男の口マンだろう』らしい。メアの比億を読んでから知つたくせに。

『Electromagnetic Acceleration Coil base

d Type: Anti Matter Rail Gun、通称エアクタムレールガン
 なんて、ロマンの最たるもの』らしい。
 「……非常用電源切れました」

コンソールルームの中は別動力系統である『空理演算』^{アカシックレコード}の各種ランプのみが光っていた。

「——なるほど、《EACTAM—Rail Gun》の動力源は電気です。発射され
 てはかなわないから、発射させないと。そういう事ですかね、我^上_司らが父よ」

『いや、分からん。回避するのが面倒だつただけかもしね。どちらにせよ、目的を達成
 された。撤収準備に入れ！』

「——そういえばいつからいたんですか？」

『つい先ほどだ。《EACTAM》を使うと聞いてな』

などと、フルレウスとナレーショナーが談笑^{諦め}していると、

「扉壊され、——うわっ！」

鎌を片手にヘカミユルナが飛び込んできた。

何を隠そう、襲撃者とは貧乳であることを隠そうとしたヘカミユルナのことであつた。

この茶^{秘密基地}番は、あのエピソードを封印しようとしたヘカミユルナの魔の手から逃げる

ための時間稼ぎだつた。

† † †

「ホント、メタいですよね」

『それしかこの小説に取り柄はないだろう』

「ひ、天使^人が気にしていることを……！」

† † †

メインコンソールルームに飛び込んできたヘカミュルナの目に映つた光景は。最高神フルレウスと、ナレーショナー、その部下たち——神々が正座してにやけながらへカミュルナ自身を待つてゐるというものだつた。

「クソ俊敏な身のこなしですね」

神々が部下の真似なんかをしている訳は、ただのロールプレイだつた。神々のほとんどは男神だつた。大半の女神たちは触^{いじら}ぬ^ぬ神に祟りなし、と高みの見物を決め込んで、不参加である。

『さて、ヘカミュルナ。じつくり冥界で話し合おうじやないか』

「……死ぬ覚悟はできているんですね」

『当たり前だ。なにせ、お前の貧乳コンプレックスは知っているからな。だがな、ここにいる全員を冥界に連れていくと、開店休業状態になるが、良いか？』

この一言で神たちの脳裏に電流が走った。

すなわち、誰を生け贋にして、自分だけ生き残るか。

自分の仕事を説明して、特赦を得ようと画策していたが、

その希望は観念に変わった。

「なら、一人ずつ逝行きましようか」

サクッと振り下ろされる鎌。

「まずは、お父様から」

切れる首。転がる頭。噴き出す血。崩れ落ちる体。

と、その瞬間。

シュン！と、ヘカミュルナの姿が搔き消え、

ガバッ！と、フルレウスが復活した。

「あ、『ディメンションキリング搔き消えるその嘲笑』起動したままでした」

第四トラップ、虚時空融合術式『ディメンションキリング搔き消えるその嘲笑』。

この術式が発動した部屋で行われた殺戮行為は、一回だけ無効化され、その後、襲撃者を置き去りにして、部屋ごと転移。

転移したことで穴が空いた空間を、虚数空間が飲み込み、襲撃者を隔離する。虚数空間は神々でさえ、そう簡単には脱け出せない。空間ごと次元の狭間を流れ続ける事となる。

だが、この場にいる全員がヘカミユルナの心配をしていなかつた。

理由は彼女の持つ能力の一つ。

それは、自ら冥界に送つた者への完全追跡能力。

冥界を許可無く脱走、脱け出す者に対する切り札だ。なにも、それは神でも例外ではない。

彼女がその力を使えば、

ほら、最高神の後ろに。

——逃がしませんよ。

『それじや、父と娘一週間水入らず、楽しんでくるわ』
直後、照明が復活。そこに、二柱ふたりの姿はなかつた。
「やつぱりヘカルナちゃんが一番強いよな」

誰かがポツリとつぶやいた。

「というわけで、ヘカミユルナ様に止められていた『何だかんだ』の部分でした。え？
何だかんだ増えてる？ 良かつたですね。ボリュームがUPしましたよ。パットだけに」

13 騙し騙され騙させ

前回のあらすじ。

パットがばれた。

走る。超える。走る。避ける。走る。屈む。走る。

深い夜の中、同じく深い森の中を影たちが駆け抜けていく。
いや、影と表現するには、いささか静けさが足りなかつた。

「だからメイド長と呼びなさいと言つているでしよう」

「いやいやローゼちゃん。その前に俺らは双子の姉妹つて設定だろ?」

「だとしても、ローゼちゃんはおかしい」

「じゃ、ローゼ姉え」

「」。却下です」

森を騒がせて、二人は木々の間を走り抜けていく。

†
†
†

ラングドニ邸には五枚の結界が存在していた。そのうち三枚が壊れているらしい。
ローゼ、メアの二人は、屋敷にあつた小柄なナイフを装備し、音の発生源の調査に向

かつていた。

ニルソニアはこの場にいない。彼女は屋敷の地下室に設置してある、結界を発生させるアーティファクトの様子を見に行つていてる。

「ここで結界の説明でも入れておきましょか。ラングドニ領を守る結界は市街地を覆わず、森林を閉じ込めるように張られています。形は橢円形。市街地の中心から反対方向に細長く伸びています。——ま、こんな程度ですかね。あ、あと双子の設定は他人から二人の関係を尋ねられた時に誤魔化すためのものです。ニルソニアさんが考えました」

† † †

「！——止まりなさい」

何かを感じたローゼが足を止め、しゃがみこんだ。

? 見えそうで、三重ない?

「三重への悪質な風評被害は止めてください。それにミニスカじゃないんですから、見えるわけありませんよ。——ギルティです」

? ギルティ……?

「サスケエみたいに言わないでください。イはどこに行つたのですか」

† † †

何かを感じたローゼが足を止め、しゃがみこんだ。メアは指示には従い、ローゼの横にしゃがみこんだが、何故止まらないといけないのか、納得はしていない様子だった。

「どうしたんだ? ローゼ長……ローゼ長つてなに?」

ローゼは素で間違えたメアをジト目で睨んだ。

「……ハア。バカやつてる暇はありませんから。——もうローゼでいいです。それ以外で呼んだら、棒人間のあだ名、定着させますから。いいですね」

「じゃ、俺もメアでいいぜ」

ちゃんと話を聞く気はあるのか、メアは、纏う雰囲気を180度変え、真面目な顔でローゼに問いかけた。

「で、どうした——トイレか?」

「……違います。あなたを畠の肥やしにしたいとは思つてますが」

「じゃあ、好きなタイプのゴブリンでも見つけたか?」

?人前に出てこないゴブリンだけがいいゴブリンだ?

「あと、途中で邪魔しに入らない我らが父も、いいゴブリンに追加で。」

「じゃあ、好きなタイプのゴブリンでも見つけたか?」

†

†

†

†

「気に食わないゴブリンなら目の前にいますが。——あなたの後ろを見てもゴブリンはありませんから。上にもいませんから。——幻覚でもないので、私をそんな目で見るのは止めてください。本当にゴブリンみたいな顔にしますよ?」

「おつかねえ、おつかねえ」

メアは眞面目のふりを辞め、オーバーリアクションで肩をすくめた。
当然すべてわかつていてやつたことである。ローゼ長は本当に口が滑つただけだが。
ローゼは大きく溜息をついた。

それでもしないと、やつてられなかつたのだ。

あの女神様が太鼓判を押したから、調査に連れてきたというのに、邪魔しかないと、連れてきたことを後悔し始めるローゼ。

どうにかならない者かと考へていると、再度気配をとらえた。しかも二か所。うち一つは……。

ローゼの脳裏で閃いた。もともと考へていた計画を大胆に変えるのだ。

「二つ気配をとらえました。メア、あなたはそちらの方角をお願いします。私はこちらを担当します」

ローゼは気配があつた方角を指さした。具体的には、順に十二時の方向と十一時の方向だ。

「両方俺がやつていいんだ——が?!」

指示された方向へ歩き始めたメア。

進行方向にやぶがあつたため、ジャンプして避けたが、何秒経つても着地しなかつた。その姿を見てローゼは、

「ああ、言い忘れていました。あなたに指示を出した方の気配は不在蜘蛛インビジブルステップと思わしきものでした。しかしながら、何者かが成りすまして私たちをやり過ごそうとしている可能性がありましたので、指示を出させていただきましたが。その心配は要らないようです」

と、労い $+ \alpha$ の成分が含まれる笑顔を作った。

そして、自分の担当の方へゆっくり歩きだしながら、メアへ追い打ちをかけ始めた。「インビジブルステップ」とは、不可視の足音という意味で、漢字で書くと不在蜘蛛ふざいぐもになります。性質はその名の通り、目に映りません。その八本脚、胴体、蜘蛛の糸に到るまで見えません。蜘蛛の口に入つたものも見えなくなります。ただし八個の紅複眼だけは不可視ではありません。生態は雑食系肉食。特に人の肉、女性の肉を好みます。特定の棲み処——巣はなく、複数の蜘蛛の巣を張り、それを巡回しています。」

メアの横を通りすぎても、ローゼの説明は続く。

「不可視、巣をグルグル回っている、この二点からインビジブルステップ、つまり、どこ

にいるのか、いつ忍び寄つてきたのかさえ、分からぬ、という異名が付きました。まあでも、気配を感じたので、近くにいるはずですが。」

1

嫌がらせでしかないローゼの詳しい説明に、さすがのメアも危機を感じたのか、救助を要請しようとするが、

「ん？
ん？
ツ
？」

口から飛び出でるのはくぐもつた呻き声。

それもそのはず、メアの口は蜘蛛の糸でしつかり綴じられていた。これではローゼへの救助要請も意味をなさない。

んんんん!

自力で脱出しようにも、蜘蛛の巣が取れる様子は、一切なかつた。

恥もキヤラもかなぐり捨てて、恥を忍んで嫌々、本つつつつ本当に厭々、だけど本気でローゼに助けを求めるメア。

その必死さが伝わったのか、ローゼの視線がメアを捉える。が、それも一瞬だけのこと。直ぐに前を向いた。

「?! んくんく！」

どこに行くのか、とメアは切羽詰まつた声を上げた。
やつぱりメアも死にたくないのだ。アイツについて説明されるまで。メア自身も
忘れていたが。

「私自身、書き忘れていましたし。時空の強制力でも働いたんですかね」

？お前の不注意だ。そんなものの働くかない？！

ローゼは歩みを止めず、振り向きもせず、

「助けてくださいローゼ様も何も、その蜘蛛の巣、オリハルコンかアダマンタイト製の刃
物じやないと切れませんし」

珍しく、メアが固まつた。

† † †

「助けてくださいローゼ様も何も、その蜘蛛の巣、オリハルコンかアダマンタイト製の刃
物じやないと切れませんよ！」

「オリハルコンにアダマンタイト。ファンタジー世界ではよくあるものですが、この
場にはないんですね。残念！」

†

いつそう、んんん言いながら、手足をジタバタさせるメア。そのせいで、蜘蛛の巣は背中まで覆い始めた。

もはや、自力ではバタつくことさえ難しくなつてしまつたメアは、ついに涙目になつた。

その時、本当にゆっくり歩いていたローゼが後ろを振り向き、
怨恨、厭忌、唾棄、ありとあらゆる憎惡の感情を含む嬉しさに満ちた笑顔で、メア

に

「さようなら」

と言つたきり、二度と振り返らなかつた。

その十分後か、三十分後か、はたまた五秒後か。

メアは、視界の端に八つの紅い灯火を見た。

† † †

森の少し開けた場所に気配の主は、三メートルはある石の上へ腰かけていた。

体格はがつしりしている。服装は灰色をベースにした軍服。顔つきはハードボイルドな印象を与える渋いものだ。

表情は覚悟を決めたようにも、愁いに満ちているようにも見えた。

自分の顔

と、そこにメイド服を着た銀髪碧眼の少女が、森の奥から現れた。
「うまでもなく、ローゼだ。

「失礼ながらお尋ねしますが、もしかしなくとも、結界を破壊されたのはあなた様でしょ
うか」

軍服を纏う男は答える。

「フン。答える義理はない。それに、人にものを尋ねる時は、先に名乗りを上げるのが礼
儀だと習わなかつたのか？」

「あいにく奴隸の身でしてね。そんな学は持ちあわせていませんし、あなたに払う必要
があるとも思えません。——ああ、申し遅れました。この地を収めるニルソニア＝A＝
ラングドニのメイド、ローゼ・キュリエードでござります。以後お見知りおきを。尤も、
その必要はないかと存じますが」

「……やはり、ここはニルソニアの治める地であつたか」

ピクリ。

「それはどういう意味——」

「ああ、こちらも申し遅れた。魔王軍二番隊隊長、ジオネスト＝フリーバラムである。裏
切り者を処刑しにこの地に参つた」

「……何に対しての裏切りで？」

「決まつてゐる。魔族に對してだ」

「…………裏切り者とは、我が主のことですか？」

「そうだと言つたら？」

「別にどうも。ただ己の職務を果たすだけです」

ローゼは、右手で腰につけた鞄からナイフを抜き、逆手に構えた。
ジオネストは左手を前にして構えを取つた。

沈黙が充ちる。

周囲が静かになつていく。

静けさと反比例するように二人の気迫が跳ね上がつていく。

両者の圧にやられたのか、常緑樹なのに木の葉が一枚ひらりと舞い落ちていく。
木の葉が地に落ちるのを合図に二人は飛び出した。

先に仕掛けたのはローゼだ。

駆け寄ると同時にナイフを右から左へ振り上げた。

対してジオネストはすかさず足を止め、バツクステップで避けた。
だがローゼの攻撃は終わらなかつた。

腕を振り上げた勢いも利用して開いた距離を一瞬で詰めたローゼは、振り上げたまま

であつたナイフを初めと逆に振り下ろした。

しかし、そのナイフは当たらない。

ジオネストは振り下ろしとは逆方向に避けた後、がら空きの左側頭部めがけて鋭い拳を放つた。

ローゼは左腕を使い、流れるような動作で拳をガードし、押されるまま少し回転。ハイキックへとつなげた。

それはジオネストにとつて予想外だつたらしく、頭にくらい、五メートルほど押し下げられた。

「まさか受け止め反撃してくるとは」

「まさか受け止める事すらできないと思われていたとは。その程度ではお嬢さまどころか、ましては私さえ殺せませんよ?」

「そうか。時間がない……」あお煽あおつてしまつたことを後悔するなよ」

そう言うと、ジオネストの姿が搔き消えた。

14 人形劇の結果

彼女が持つ八つの赤い眼が人影を捉える。

近頃人間は巣に引つかからない。

よしんば引つかかつたとしても、たいてい男、それも筋が多く食べにくいのばかり。
それが、どうだ。久しぶりに獲物がかかつたと糸から伝わり、駆け付けてみると、それが大好物のうら若き乙女なのだ。

思わぬご馳走を目の前に、不在蜘蛛の食欲は上がらざるを得ない。

ただ、残念なのが一番うまい部位である乳房が少し小さいこと。

あの張りがありながらも、蕩けていく食感がたまらなくうまいのだが。

† † † †

「※蜘蛛の感想です。人が食べてもおいしくないと思われまっす」

?……食つたのか?

「ええ、娘さまのパットですけどね」

† † † †

不意に、身体が宙を舞つた。

背中に衝撃があつた。

地面に落ちたのかと思ったが、不自然に斜めつてある。

身体を起こうとして、動かなかつた。動けなかつた。

悪意の糸はメアを繋ぎ止めていた。その起点が正面から背中に変わつただけだつた。

ギ
リ
リ

と、木々が音を立てる。巣の主が糸を登り始めたのだ。

ギシリギシリと連續して糸がきしむ。音の発生源は少しずつ獲物に近づいていく。

不意に音がやんだ。同時にメアのひざ下あたりに何かかきつけられた。メアがそれの正体を知る暇もなく、

足
が

激痛に耐え切れず、メアの口から音無き悲鳴が飛び出した。

今もなお血を噴き出し続いているメアの足は宙に浮かび、徐々にその体積を減らして

七
七

不在蜘蛛が足を抱え、食べているのだ。

咀嚼音が体に染み込む、ムシャムシャ、ボリバリ、グチュグシヤ

食べられない衣服を吐き出し、牙をむく。

こぼれ出た血を浴びたことにより、口周りの輪郭が一部あらわになる。それはまるで、『喰つてやる』という食欲が具現化したようだつた。

メア自身からの出血はない。蜘蛛糸で止血されていた。

蜘蛛にとつては久しぶりの人肉、しかも女。

そんな蜘蛛がせつかくの御馳走を殺して、鮮度を落とす真似はしない。

少しずつ少しずつ、体を切り取つて食べていく。

食べられる方からしたら、たまつたもんではない。

目の前で、血まみれの牙が、自らの体をむしばんでいく光景を見せられる。一種の拷問であつた。

ここでようやく、メアは自身が喰われていることに気づく。

だが、もう逃げ出すことはできない。

蜘蛛の巣に絡めとられ、足をなくしたメアは、大人しく蜘蛛の食卓に上がるほか無くなつた。

⋮
⋮
⋮
⋮

どのぐらい、時がたつたのだろうか。

そこには、あのにくたらしいメアの姿はなかつた。

メイド服は切り裂かれ、メアは切れ端を纏うばかり。

その切れ端も蜘蛛の巣のおかげで張り付いているに過ぎなかつた。

その前に、衣を纏える体積がなかつた。

下半身、子宮、腸、腎臓、肝臓、右腕、左肺を喰われていた。

チカチカと、頭の中で光が飛ぶ。

口から出てくる吐息は、ユー、ユー、と虫の息だつた。

すでに、乳房と心臓に糸がかかっている。

殺すより殺さない方が難しくなり、また、鮮度もだんだんと落ちてきただため、この

拷問 食事法を続ける理由がなくなつてしまつた。

そのため、まだ生きている間に一番美味しいところを喰らおうという事らしい。

いま捕食者は、左腕をむさぼつてゐる。

それを喰い終われば、遂にメアの心臓へと手を伸ばすだろう。

そして、
そして、
そして。

肉片と血潮で彩られた牙。^{いろど}

それが、最後の光景だつた。

†

†

†

「あーあ、メアさん死んでしまいましたか。まあ、ローゼさんの地雷を踏んでましたしねー。でも、このローゼさんは、地雷わかりにくいですからねー。仕方ないでしよう。でも、もう少し警戒してくれてもいいと思うんですけど。」

「まあ、あの頭でつかちにそんなことできるとは思いませんが」

「さて、メアさんを生き返らせなければいけませんね」

? 少しは説明をしろ。いつたいどういう事だ?

「げ、上司。メアさんが死んだのはその——」

？それは以前聞いた。地雷の話だ？

「へ？ ああ、12話の後書きで耳打ちしてましたね。忘れてました」

「ローゼさんの地雷とは、ズバリ「削除済み」です。……ズバリとまで言つたのに、

禁則事項ですか。伏線を張るんですか。そうですか】

？私には伝わった？

「——読者の皆様には一切伝わってないんですが】

「もう、少し遠回りして教えましようか】

「いきなりですが、【空理演算】^{アカシックレコード}とは、ラプラスの悪魔です】

「未来予知すら可能にする演算能力を持つた量子コンピュータです】

「有名どころで言えば、樹形図の設計者ですね。^{ツリーダイアグラム}あれです、とあるの】

「ラプラスの悪魔は、不確定性原理により成り立たないはずだろ、と考えたそこのあなた。」

「鋭いですね】

「不確定性原理とは何ぞや、っていう人は、g g r k s】

「大雑把に言えば、二種類の量子のデータ、同時には分からん！ つてことです】

「しかしですね、同じ次元から観測するから、分からぬのです。」

「紙の上に書いた積み木の裏が見えないのと同じようなものです。」

「具体的な数値は忘れましたが、高位の次元から観測すれば二つのデータを同時に知ることができます」

「なんかようわからんわ、という人は未来予測できるし、世界をシミュレートできるス
ゲーパソコンだと思つてくれればいいです」

「上司が作りました」

「その、未来予測ができるスペコンでシミュレートした別の世界だと、ローゼさんは自
殺しています」

「こんなものでいいでしようか、上司」

？……長い。本文よりも長くなつていなか。読むのがしんどい？

「これでも、抑えた方ですよ。これ以上は無理です」

？いや、括弧だらけで？

「……」

「さて、次回はメアさんを蘇生していく話になります」

第1章 人形たちは嫌い合う

Triangular

Hate

15 再起動 with Beloved Stranger

「——そうですね——」

「——いいのかしら——」

「——仕方がないですから——」

誰かが会話している。うまく聞き取れない。いつたい何の話だろうか。

「おや？ 目が覚めましたか？」

目が覚める？ 僕は寝ていたのか？ たしか……

記憶を探る。

真つ先に飛び込んできたイメージは、大きく開いた蜘蛛の顎あごとだった。

「!? 蜘蛛は?!」

「ここに蜘蛛はいませんよ？ ここにいるのは娘さまと私とあなただけですよ」
 そんなことを言われて初めてナレーショナーのいうところの『あなた』——メア・キュリエイドは周囲を見渡した。

そこは例の真っ白い空間だった。

「あ、一回言つてみたかったセリフがあるんです。『おお、メアよ。しんでしまうとはな
 きかない！』……あれ？ おおゝい、聞こえますか？」

ただ、『例の』という定冠詞はもう使えないかも知れない。

何故なら、あたり一面の白い床にメアが生きていた世界の品々が散乱していたのだ。
 小さいものはデジタルデバイスから爪楊枝まで、大きいものは戦艦から高層ビルまで。戦闘用ロボットもあつた。

マンガ、TV、戦車、雑誌、クツキー、ゲーム機、自動車、布団、スマホ、飛行機、田
 んぼ、銃、黒板、etc, etc, ……。中にはビキニアーマー、壊れているヘカミユ
 ルナ様のフィギュア、大人のおもちゃなんてものもあつた。

その中の空白の空間に、メアは床の上に寝かされていた。

†
 「娘様のフィギュアはどことは言わないです、精巧につくられすぎていてですね

……胸部がページします】

？…………あいは良いやつだつたよ？^{作者}

「……どこだここ。ゴミ屋敷か？」

メアがぽつりとつぶやくと、反応したナレーショナーが
 「ゴミ屋敷には同意します。もう少し整理すればいいのに、『把握している。変更の意味
 なし』と上司がいうものですから。私たちにはわからないことが分からないのでしょう
 かねえ？ そもそも——」

ここで、もう一人——ヘカミユルナが口を挟んだ。

「ここまで。無駄な時間を過ごしている暇はありません。ナレーショナー、始めなさい」

†

「うわ、初っ端から真面目、あれ仕事モードですよ。私としてはもう少し雑談を楽しみ
 たかつたんですけどねえ」

？貴様のは雑談ではなく、愚痴だろう？

「すぐ横に愚痴の対象がいたらさすがの私でも遠慮しますよ」

?!??!

「何ですか、その意外そうな顔と反応は」

「なんでそこで怒るの？ みたいな反応やめてください。自覚はあるので余計傷つくんですよ」

「そこまで。無駄な時間を過ごしている暇はありません。ナレーショナー、始めなさい」
「あ、ヘカミユルナ様居たんだ。気づかなかつた」

「!？」

「前から言いたかつたんだけど、ヘカミユルナって長いからあだ名で呼びたいんだよね
？ ヘルナちゃん？ ヘカルナちゃん？ どっちがいい？」

「」

「うんと、はい！ 人気投票の結果が出ました。ヘカルナちゃんが69% ヘルナ
ちゃんが30%ですって！ 残りの1%は、ひんにゅ——貧乳ちゃん！」

by twiter

「ナレーションさん？」

「」

「貧乳ちゃんをわざわざリプで送ってきた人、恨みますよ……とても痛かつたです」

「」

「あ、いい。すみませんでした……」

これも全部メアさんが悪乗りするからで、私は

は わ る く な
」

「ナレーションナーさん？」

「すみませんでした」

† 「では、気を取り直して、進めてください」

「はーい。さて、前回と同じでは面白くありませんよね?……ゴツテゴテの様式美お約束で行きましょうか」

「……あなたは死にました。トラック——じゃない、蜘蛛に体中を喰われて死にました。
そこで、何か一つ能力を授け、異世界に転生させてあげましょう。好きなものをこの中
から——」「おい今まで

メアに止められて、ナレーションナーはお目目ぱちくり。

「はい? なんでしよう?」

「なんでしょうじやねえ。一切説明がないんだが」

「したじやないですか。一回目の時に」

「……」

「そんな目で睨まないでくださいよ。普段振り回されてるからその意趣返しですよ
「……ナレーションナー」

「娘さまもメアさんの味方ですか。そうですか。いいですよもう。決めました。口止めされたことまで喋つてやりますからね」

それを聞き、慌て始めるヘカミユルナ。

「え、ちよ、ちょっと待ちな——」

「待ちません。この空間は我らが父があなたが元居た世界を研究するために作りだしたものです。また、この空間内にあるものはあなたの記憶を読み取り、具現化したもので

す」

「次に、あなたが死んだのちにこの空間に送られてきた理由は、死ぬのが早すぎて話にならないからと、ヘカミユルナ様があなたに渡し忘れていたものがあるからです」

「そして、これからあなたには渡しそびれていたものを受け取つてもらい、下界に戻つてもらいます。何か質問は

ここまで、息継ぎ無し。

†

「すこしばかり頭に血がのぼつていたんです。ゆるして」

?メアへの意趣返しではなく我が娘への八つ当たりに変わっている?

「ユルシテ」

†

†

ナレーショナーに疑問はあるかと問われると、メアは一瞬呆けるが、その後すぐに意図を察し、仰々しい身振りで、

「この流れで行くと、この質問しかないだろう。『一体全体、麗しの女神様は何をお忘れになつたのでしょうか?』」

ナレーショナーはヘカミュルナの方を向き、

「だそうですよ。麗しの女神様」

話を振られたヘカミュルナは恥ずかしそうに切り出した。

「——はあ、雉も鳴かなかつたら撃たれないのに「え、やだ怖い」……お恥ずかしながら、この手の展開ではお約束の能力付与、別名『環境適応』を忘れていました」

「なんだそれ」

「あなたがいた世界でもあつたでしょう。異世界転生系と言われる小説が。その中で高位の存在から、主人公が何らかのチカラをもらつていたシーンがあつたでしょう」

「確かにあつたが……」

†

「所謂なろうでのチート能力を授けるシーンですね。いろんな種類の能力がありますが、メアさんに贈呈されるのはどのような能力になるのでしょうか?」

?筋肉強化?

†

「却下です」

「そのシーンを我々はこのように捉えました。あれは、肉体及び魂をその世界に合わせた形に変え、世界からの根本的な拒絶、つまり生命として認識されない事態が起こらないうようにするためだと」

「つまり異世界に適応するために体などを作り替える際、何かのはずみでチカラが目覚めるのだと」

ヘカミユルナはカツプを傾け、口を潤した。

「その……君の体をこの世界に合わせるために弄つてたら、なんか出た。その力ね、原理不明なの。ごめんね？」

「こんな風に説明したら、神の威厳はありませんし、説明された方も不安を感じます。そのため、転生者が一番不安を感じない、言い換えると一番違和感を覚えないカバーストーリーを開いたのでしょうか？」

「ガバガバ理論過ぎません？ こ○すばのクズマさんとかどうなるんでしょう？ 言うな。娘なりの解釈だろう。それにしてもそのような考察聞いていないのだが

……我々（一人）？

「一番上司がひどいこと言つてません？」

† †

「長々と語つていますが、簡単に言えば、生命維持装置の電源を入れ忘れていた、みたいなものです」

ヘカミユルナ様のどこに向かっているのか分からぬ、けれど微妙に関係がある話を遮つて、ナレーションナーが話題を戻した。

「割と致命的なミスでは？」

「その通りです。通常なら一回きりの転生チャンス、ですがこの度の死亡はパンジー ジャンプの紐が取り付けられる前に背中を押されたようなもの。そこで、特別にもう一度だけやり直す権利をあげましょう！」

メアは真顔で。

「いや別に？ いらないが」

その返答は、ナレーションナーやヘカミユルナが期待していたのとは違うものであるはずだ。

何故なら、メアの不参加は計筋肉ダルマ提案の劇画の失敗を意味しているのだから。だが、

「ええ！ メアさんならそういうと思つていましたよ！ ね、娘様！」
…本当にメアさんだ

「そうね。予想できる回答だつたわ。だから、これが第一のプレゼント」
 ハカミユルナ様はその『削除済み豊満な胸』の谷間から小型の板を取り出し、メアに渡した。
 金属製で、ところどころに「ふあての魔術回路のような」複数のラインが走っている
 デザインだ。

「……これがなんだ？ こんなもので俺がやり直したくなるとでも？」

怪訝そうにメアに問われても、一人の笑みは崩れなかつた。

「その通りです。その真ん中をポンと触つてみてください」

「こうka——！」

——剣を向けられ、【憎悪】を向けられ、呪詛を向けられ、紅い空と紅い月
 脳裏に多くの情景が流れていく。

——笑顔を向けられ、手を向けられ、〈信頼〉を向けられ、黒い空に輝く月
 頭に激痛が走り床をのたうち回る。

——銃を向けられ、『好意』を向けられ、「好意」を受けた。そして——

いくつものシーンがフラツシユバツクしては消えていく。違和感ごと消えていく。

†

ようやくメアの頭痛が収まるころには、ヘカミユルナ達は三杯目の紅茶を嗜んでいた。

「削除済み」

「なにをした」

「削除済み」

ナレーショナーが別段興味もなさそうに

「メアさんがもともと持っていた記憶を一部返却しました。ただ今は実感がないとは思いますけどね」

「記憶を返却？」復元でもなく正常化でもなく、返却？　いやまたその前に……一部？」

二人がその尤もな疑問を取り合う事はなかつた。

「まあ、そのうち分かりますよ。記憶のことも、このような処理になつた理由もね。あとでするといつて『あいつ』の説明「四話で言つていた」も、もういらぬいでしょう？」では間髪入れずに次行きますね！」

ナレーショナーがそういうと、

いきなり、

ヘカミユルナ様が額に唇を落としてきた。

「?!」

触ると同時に頭に電流が走る。

短時間でキヤパシティを大幅に超える情報を、二回も入れられた脳が悲鳴を上げているのだ。

そして、脳裏に唐突に響く合成音声。

†

「CV：ドナ・○ーラで設定しましよう！ そうしましょう！」

？いや、AC、セレン○イズの伊藤○紀も捨てがたい？

「あーそちらもいいですね。悩ましいです。」

「ええい、クールな女性の声と思つてください！」

「これは声豚とかではなく、ヴィジュアルが存在しないキャラクターが唯一勝負できるのが声なのです。そこに力を入れずしてどうしましようか」

式
正
式
名
疑
似
空
理
演
算
型
活
動
補
助
相
互
術

system
起動
Boot Registration for use : :
Demilightened type actibility assistance interaction Reinforce

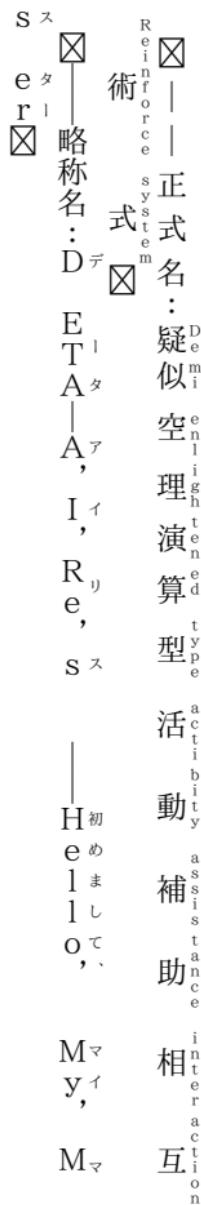
— | — 略称：
DETA—AIRies

H
e
l
l
o,
M
y

M
a
s
t
e
r
☒

悲しくて、だけど知らない声が脳裏に響いた。

16 D E T A (データ) — (—) A I R e S (アイ リスト)



とても懐かしくて、悲しくて、だけど知らない声が脳裏に響いた。

「誰だ。いや、お前は何だ」

その誰何には、ナレーショナーナーが答えた。

「何つて、あなたに与えられた「削除済み」、

「俺が聞きたいのはそういう事じゃなくて、」

DETA_タ

A I R e S ですよ?」

完了了☒ 「削除済み」の実装を開始 実装 完了まであと complete implementation: Time to

☒ 身体の最適化を開始 : : : 完了まであと
 Body optimization start : : : completed until
 ☒ 憶の再生 : : : 完了☒
 memory salvage : : : completed

「削除済み」 [鑑定眼(偽)] の復元 : : :

完了☒

問い合わせは音が重なりすぎたアナウンスによつてかき消されてしまつた。音が重なりすぎた為、メアにはその意味が分からなかつた。しかし、それだけでナレーショナーハンには十分だつた。

「おや？ もう最適化が始まりましたか。では失礼して」

「質問に答えろ、ナレーショナ

「えいっ」

アああああ?! イイツ→タイ←メガアアア→

勢いよくメアの眼の中に指を突き刺した。それこそ、目が潰れるぐらい強く。

……痛そうな描写をしているが、ネタに走つているあたりそこまで痛くないのかかもしれない。

「……動作も含めてそこまで物真似できるなら、心配は要りませんね？」

「ああ、多分いらぬいな！ 必要なのはテメエの心配だ！」

「どういうことで s 「そら、お返しだ！」 u? あ、あれ？ あんまりいたくなこれ後から凄い痛みがあああああああ！」

こんなこともあろうかと、メアは転がっていたわさびチューブを拾い、ポケットに忍ばせておいたのだ。

「このシーン書き忘れていました。この後、前回に追加しておきましょう」

？たとえこの小説がメタ上等なものだとしても、度がすぎるぞ？

「じゃあ、ここで補足したという形で、一つ」

†

ナレーショナーはメアをサポートするためだけに作り出された存在であると、以前言つたことがある。

が、そんな生まれたてほやほやの天使が、目に刺激物を入れた経験など持つているはずもなかつた。

つまり、

「目がああああああああああああああ！！ 目があああああああああ！！」

目を押さえたままもんどり打つて倒れ、そのまま床をのたうち始めた。

それでも、生まれて初めて感じた目の痛みには耐えられないのか、ナレーショナーは

転がり始めた。

そのまま勢い余つてメアも巻き込み、周囲の（ガラクタ）の山に突っ込んだ。

†

†

ガラクタの山に突っ込んだナレーショナーとメア。

筋肉
ダルマ

あたりに散らばつてゐるガラクタの出処は、最高神サヘルベーリジが適当にメアの記憶から 引張り出してきたもので、その性質上メアが元居た世界でも存在していなかつた空想 できえ、実体を得ることがあるので。

つまり何が言いたいかというと、突っ込んだ先には鋭利な神殺しの槍の先端が。

「アツー——！」

どことは明言しないが、うら若き乙女の一部に突き刺さつた。

そして当然のことく、出血する。

ナレーショナーはメアをサポートするためだけに（r yで、痛みに耐性などない。

先ほどとは逆向きに回転を始める天使（）。その際うら若き乙女の一部を振り回すものだから、あたりに血が飛び散る。

メアは逆回転を始めたときに分離したので、これ以上降りまされずに済んだが、代わ

りに血が目に入り、視界が紅く染まつた。

天使の血など、耐性のないものには劇物でしかなく、

器が成つてない

「またかよ！ 目がイテエ！」

メアがその場にうずくまり、ナレーションナーが再び別の山に突っ込こもうとして――

「――一人そろつて何を遊んでいるのですか」

二人して、円卓に座っていた。

痛みなどどこにも存在していなかつた。二人の傷は無くなり、飛び散つた血痕も消えていた。

「ナレーションナー、もう十分でしょう」

流し目をメアに向け、意味深な台詞をあのヘカミュルナ様が言つた。

怒ると怖い神^{上司}からの叱責に、天使はお尻を擦りながら頷いた。

満足げにほほ笑んだ冥界の女神様は、メアに目線を向け、
メアの体がクイつと引つ張られるように浮き上がつた。

「――な」

だんだんと、天使と女神の姿が小さくなつていく。

このままだと、何もわからないまま戻されてしまう。焦つたメアは声を荒げる。

「おい！ 結局何だつたんだ！ ここでの茶番は！」

それに対する返答は、なかつた。

†

†

†

気が付けば、元の森だつた。

足元には、大量の血が飛び散つた跡が残つていた。

よくよく見てみると、メイド服の残骸であらう布切れも散らばつていた。足の裏に地面の感覚が伝わつてこない。

あたりを観察しようとすると、ふと抵抗を感じる。

その感覚には心当たりがあつた。

「…………マジか」

ナレーショナーは死んだ場所、蜘蛛の巣の上に蘇生してくれやがつたのだ。

当然、身動きとれない。メアはまたしてもピンチに陥つたのだ。

「くそ、どうしようもないぞこれ。またすぐあそこに逆戻りか？」てか、あいつらが能力

の説明してたらこんなことにはなつてないだろ！」

自分で言つたセリフによつて、今直面している蜘蛛の恐怖よりナレーショナーラたちへの苛立ちが勝り始めたとき、



了まであと 37・8%

lete Sync:

ERROR

ERROR

同期

が完了していません

同期

が完了していません

同期

が完了していません

同期

が完了していません

同期

が完了していません

█ D E T A — A , I , R e , S 限 定 起 動 を 開 始 し ま す █
 MODE : restriction

機械音が聞こえてきた。

今まで何回も話の流れをぶつた切つてきたその声にまたしても苛立ち、怒り任せに右腕を動かそうとした。

と、同時に蜘蛛の巣の抵抗がなくなつた。メイド服の右袖もなくなつた。

「……は？」

片腕ノースリーブメイド服のメアは、いきなり自由になつた右腕と一緒に蜘蛛の巣の上で呆けるのだった。

「何が起つた？」

その吐露は空に消えるはずだつた。
が、

「このナレーショナーがお答えしましよう！」

なんか吹き切れたような天使がそこにいた。

いや、よく見たら後ろが透けている、立体映像だつた。

「一番初めにメアさんに与えたのは、メアさん自身の記憶です！ いろいろ覗きましたが、記憶自体はいじつていないので安心してくださいね？ 「おい」次に与えたのが、本

命のスキル DETAIL ARIESです。こいつの効果は折り紙付きですよ？ メアさんの行動、思考、魔法、ありとあらゆる動作を補助するスキルです！ 「まで」今起きたのは身体強化ですね！ そして「ちよつとはこつちの話も聞け！」

† † †

メアの姿が空に消える。

それは、メアが現実世界に生き返ったことを意味している。

「……ふう」

ナレーショナーは作り笑いを剥がした。

ヘカミユルナはいつの間にかいなくなっている。

疲れ切つた顔が仮面の下から出てきた。

氣だるげに指を鳴らす。空間の白が黒に変わる。散らばっていたガラクタは虚空に

消えた。

白一色だつた場所が、漆黒に塗りつぶされる。

ナレーショナーは一人闇の中に佇んでいた。

「——ああ」

声とも音とも取れない息をついた。魂が漏れ出るような吐息だつた。

噛み締めるように、ゆるりと彼女は背後を振り向いた。

「——旧個体名□□□□□、現識別名メア・キュリエイド」

「一切の齟齬が確認されませんでした。同一存在です」

隈がはつきりと分かる顔と頭がゆっくり下がつてゆく。

虚空に向け一礼した。

「——神々の皆さん、お疲れ様でした」

「————[.]————」

声が爆発した。

「いつよつしやあああ!!」「わあああ!!」「一生分の徹夜と残業をした気がする!」「やりましたわ! お姉さま!」「やつたああ!!」「ええ! ごくろうさま!」「ダメだ! 眠すぎるが寝れる気がしない!!」「今宵は呑むぞおおお!」

「————[.]————」

「酒だ！ 酒を持つてこい！」 「さつき消えた中にいいお酒なかつたけ？」 「それだ

眠たそうな顔をして神々が騒ぐところを見ているナレーショナー。
そこに声をかけるものが現れる。

「ご苦労」

「ああ、上司ですか。何の用ですか？ 今私は猛烈に眠たいんです」
眠気のせいで、普段よりも眦をあげて最高神をにらむ天使。
凍るような視線を受けても、やはり最高神、一切動じなかつた。
それどころか、笑みさえ浮かべ。

† † †

「この時、吐き気がするほど気持ち悪かつたです」

? ?

「この、なん……だと……っていう顔も同レベルですね」

† † †

「何、労いに来ただけだ」

「なんかフランクなの気持ち悪いです」

「……今の暴言は寝不足のせいにしといてやる」

ごほん、と咳払い。

最高神が語りだすが、フランクなのが気持ち悪いので以下省略。

† 「久しぶりのダイジエスト！」

「気持ち悪いという私の主観で上司の感謝状？　は省き、要点のみ説明させて頂きます」

「実はメアさん、通常の蘇生だと効果がなかつたんですよ」

「というのも、メアさんが特異点なんです」

「このことは前に言いましたつけ？　まあいいです」

「この場合の特異点というのは、神ですら見通すことができないほどの可能性を持っている。という意味です」

「この可能性のせいでの、メアさんは一度死ぬと源典にまで戻つてしまします」

「なので、同じ可能性を選ばせないと『蘇生』できないというわけです」

「神々が疲れているのは、この作業をしていたからなんですよ」

†

長い長い最高神の話がやつと終わると、荒んだ目をした天使がいた。

「で、長つたらしい話をしに来たわけじやねえんだろう、です？　さつさと本題に入れや

筋肉ダルマ野郎、です」

……あれ、私こんなこと言つてたでしようか？ 実はこの時眠たすぎてよく覚えてないんですよ

「ライライしすぎて、ノゲ○ラのいづ○たんみたいになつてますね。」

「……何度目か数えてないが、寝言として処理する。先程の話が本筋だ。これ以上は何もないぞ」

「つまんねえ話をダラダラしやがつて、です。私は寝てくる、です」

フラフラと歩き去つていくナレーショナー。「てかよく殺されませんでしたね」

周囲の神々も酔いつぶれて起きているものがいなくなつていた。

一柱になつた最高神。

ぼつりと一言、「Dデータ^{データ} Aアイリス のナレーター枠つて空いてたよな」

書き手、消滅の危機だつた。

「あ、殺されるのと同意義のバツが待つてましたね」

これが、先のハイテンション天使につながるのだが、それはまた今度。